

晩年の不遇 アリストテレスがリュケイオンを主宰したのは前三三五年より三二三年に至る十三年間であるが、この間アレクサンドロス大王は金錢及び標本を送るなどして舊師の研究を助けた。然しながら晩年に於てアリストテレスの身邊には不幸な運命が重なり生じた。第一に彼は妻を喪つて悲嘆に沈み彼女の友人にして侍女たりしヘルピュリス¹⁾と同棲し、ニコマコス²⁾といふ息子を擧げた。第二には彼の親戚にして弟子たるカリステネス³⁾がアレクサンドロス大王に従つて遠征し、大王と不和になつたことから、延いてアリストテレスと大王との間にも親交が絶たれた。(但し彼が大王毒殺の陰謀に加擔したとの傳説は後世の附會に過ぎない。)前三二三年大王が歿してよりアテナイにはマケドニアの拘束を脱せんとする運動が起り、マケドニアに好意を有する者はその身が危くなつた。三二二年アリストテレスもこの勢圍氣の犠牲となり、無神論者として告發せられたので、裁判に先立つて自らエウポイアのカルキスに遁れ、そこに心ならざる閑日月を送る間に、同年の夏かねてからの胃病が悪化して遂に歿した。時に六十二歳である。遺骸は故郷のスタゲイロス市に運ばれ、そこで英雄の如くに尊崇せられ、年々の祭事が行はれた。

二 アリストテレスの教育思想

1) Ἐρπυλλες. 2) Νικομάχος. 3) Καλλισθένης.

1) Aristoteles, Politika.

アリストテレス教育思想の取扱方 アリストテレスの教育思想は主として彼の『政治學¹⁾』第八卷に述べられてゐるが、その内容はプラトンの教育思想を出づること少く、否寧ろ更に貧弱であり、且それはプラトンに於けるが如く哲學的基礎づけや神話的解明と直接に結合して居らない。蓋しプラトンに取つて教育思想と相即不離であつた形而上學的思想はアリストテレスにあつては獨立せる學としての形而上學に整頓せられ、又ソクラテス・プラトンの教育方法はアリストテレスによつて論理學の體系に組織せられた如く、各々の思想領域が夫々獨立して學的部門に分れ去つたために、教育論として残された固有の部分と比較的貧弱となり、且無味乾燥に陥つたのである。従つて又後世の教育思想に及ぼしたアリストテレスの影響も、彼の教育思想そのものから來てゐるものは少く、寧ろ彼の形而上學や論理學や心理學や倫理學等から來てゐるものが多い。斯かる事態を考へるとき、吾々は遡つてアリストテレスの廣汎な學的業績の各部門を検討し、そこに教育的に重要な契機を取出して、これを彼の教育論固有の叙述に結合しなければならぬ。この事は勿論頗る困難な企てであつて、その全き遂行は將來の特殊研究課題として保留する外はないのであるが、今は大體哲學史的知識に導かれ、差當り必要な部分だけをアリストテレス原典より參酌する程度に於て、當面の通史的任務を果さうと思ふ。

- 1) εἶδος. 2) ὕλη. 3) δυνάμει. 4) ἐνεργεία. 5) ἐντελέχεια.
6) τὸ οὐ ἔνεκα. 7) τὸ ἐξ ἀνάγκης.

アリストテレス形而上學の教育的意義 周く知られてゐる通り、アリストテレス形而上學の根本的特質は、普遍的本質をば個別の現象の中に顯現せるものとなし、而もこの事は「形相」¹⁾と「質料」²⁾との結合によつて成ると考へる點に存する。質料は事物の本質を「可能態」³⁾に於て具へ、それに形相が作用することによつて事物の本質は「現實態」⁴⁾に現はれる。あらゆる生成現象は質料が形相を得て事物の本質を實現しつゝある過程である。斯くして各々の事物に内具する本性―各々の事物が實現すべき究極目的の實現された状態―が「圓極」又は「圓現」⁵⁾と呼ばれる。アリストテレスはこの事を有機體の發展及び藝術家の造形美術活動を以て例證してゐる。この例證が屢々教育作用の本質を説明する際の類推に用ひられる程、それ程アリストテレスの上述の思想は教育的解釋への暗示を含んでゐる。即ち質料はやがて教育の可能性としての人間自然の素質であり、形相は斯かる素質が志向すべき人間生活の理念である。各人の素質をば理念によつて形成し、その本性を發揮せしめて圓現即ち各人の完全なる個性にまで到らしめる所に陶冶の本質は存すると解せられる。而もこの場合に形相はそれに向つて質料が形成せらるべき目的因⁶⁾でありながら質料の側にも亦必ずしも形相のまゝに形成せられざる偶然的反形相的なる機械因⁷⁾があつて、この兩者の對立緊張の關係に事物の現實が把握せられてゐるアリストテレスの見解は、そのまゝ教育に於て、

- 1) Causa materialis 2) Causa formalis. 3) ἠρεπτικόν. 4) κινήτικόν κατὰ τόπον. 5) αἰσθητικόν. 6) νοῦς. 7) Περὶ Ψυχῆς. 8) ὄρεξις.

自然的素質と價值的理念との緊張關係に陶冶の本質を求める立場に適用せられる。斯くの如く素質を所謂質料因¹⁾とし理念を所謂形相因²⁾として、この兩契機の辨證的關係に陶冶の本質を求めることにより、アリストテレスの形而上學は永遠の教育的意義を得るであらう。

アリストテレス心理學の教育的意義 上述の如き形而上學の見地は心理學的展開をなすことによつて益々具體的なる教育的意義を現はして來る。アリストテレスによれば、先づ人間の心身關係に於て身體は精神によつて形成せられ統制せられ運動させられる所の質料であり、精神は身體がそれに向つて動き、それを實現すべき形相であり圓極である。更に精神の中では、同化作用や繁殖作用を司る所の植物的精神と、自己運動¹⁾及び感覺²⁾を表徴とする動物的精神とは人間に特有の理性³⁾に對して質料であり、理性はそれ等に對して形相である。吾々はこゝにアリストテレスの「心理學」の内容の詳細な論究に立入る違も必要もないのであるが唯希臘的心理觀一般の特質を背景として、而もアリストテレスの獨自の見解を示せるものとして、次の諸點を注意しなければならぬ。第一は知情意の三機能の關係であり、第二は知覺に於ける意識の統一性であり、第三は理性の理論的實踐的並びに創作的三様相である。第一にアリストテレスによれば動物の身體の合目的活動は「欲望」³⁾より起るのであるが、この欲望は快不快の感情より、快なるものを追求し不快なるものを忌避せんと

する形に於て、發生する。更にこの快不快の感情はその對象の表象並びにその對象が或は追求すべきものであり或は忌避すべきものであるといふ事の表象を前提とする。斯く表象が感情の前提となり、感情が意欲の生源となると考へる點に於て希臘心理學一般の主義的特色を現はしてゐるのであるが、アリストテレスはこの關係を特に強く把持し、それを判斷や推論の論理的機能に當嵌めて表現してゐる。即ち彼によれば、意欲の領域—實踐の領域—に於て、追求し忌避することは、その前提たる表象の領域—思惟の領域—に於て肯定し否定することである。「意欲すること」と推理することとは同一である。「思惟に於ける肯定と否定とが、意欲に於ける追求と忌避とである。」²⁾ 第二に動物的表象生活の中心は感覺的知覺であるが、併しアリストテレスはこの場合に個々の感官に與へられる知覺を全體的知覺にまで結合し同時に數や位置や運動等を把握する作用として意識の統一性を重視し、これを司る器官として「共通感官」³⁾を想定した。知覺が表象として保持されたり、それが「無意的想起」⁴⁾又は「有意的想起」⁵⁾として再現せられることも、又自己の状態を知る所の内部知覺も、彼によればこの共通感官の司る所である。この場合に吾々の解釋上注目すべきことは、彼が意識の斯かる統一作用を呼ぶのに「中庸」⁶⁾といふ名を以てせることである。この意味に於ける「中庸」は實踐の領域に於て欲望を理性が統一する作用に解釋せらるべきであると吾々

1) τὸ γὰρ βουλευέσθαι καὶ λογίζεσθαι ταύτων.

2) Aristoteles, Ethika Nikomacheia VI. 2.

3) κοινὸν αἰσθητήριον.

4) μνήμη.

5) ἀνάμνησις.

6) μεσότης.

1) νοῦς ποιητικός. 2) νοῦς παθητικός. 3) πάθος. 4) λόγος.

5) νοῦς θεωρητικός (τὸ ἐπιστημονικόν) 6) νοῦς πρακτικός.

7) ποιεῖν. 8) θεωρεῖν. 9) ὁ θεωρητικὸς βίος.

は信ずる。これを明かにするためには併し理性の作用に關するアリストテレスの所説を聽かねばならぬ。即ち第三に理性はアリストテレスによれば、人間に特有の能力であり、それは、上述の如き知覺表象や欲望衝動を質料としてそれ等に働きかける形相である。まさしくそれ故に形相としての理性は質料としての表象や衝動の外にあるのではなく、それ等に於てのみ現實に存在する。アリストテレスはこの關係を明かにするために、理性をば「能動的理性」¹⁾と呼び、感覺や欲望をば「受動的理性」²⁾と名づけてゐる。「受動的理性」とは即ち個々の人間の身體の状態に制約せられて生ずるものであつて所謂パトス³⁾であり、それは能動的理性に發動の機縁を供する。能動的理性はパトスに對するロゴス⁴⁾であつて、受動的理性としての感覺や欲望に働きかけ、それ等を統一し加工し形成する。斯くの如き統一形成の作用としての理性は、更にアリストテレスによれば「理論的理性」⁵⁾と「實踐的理性」⁶⁾に分れ、なほ第三に「創作」⁷⁾の作用ともなる。この理性の三様相はやがてアリストテレスに於ける學の三部門—理論哲學、實踐哲學、藝術哲學—の分類原理であるが、それはまた生活の三形式をも生ずる譯である。理論的理性は端的に眞理のために眞理を観る作用であつて、アリストテレスはこの作用を「觀照」⁸⁾と名づけ、それによつて最高の眞理に與り永遠の淨福を得る所の「觀照的生活」⁹⁾をば人生の最高の生活形式であるとした。次に實踐的理性は後述の如く欲望を支配し

- 1) ὁ πολιτικὸς βίος. 2) ὁ ἀπολαυστικὸς βίος. (Ethika N. 1. 5.)
3) κάθαρσις.

て道徳生活を實現せしめるものであるが、アリストテレスは斯くして生ずべき廣義の道徳生活！實踐生活——を更に名譽權勢を目ざして政治上に活躍する所の「政治的生活」¹⁾と、物質的財貨の獲得享樂に向ふ所の「享樂的生活」²⁾とに分けてゐる様である。斯くしてプラトンは哲人階級と國防階級と生産階級とに分類した生活形式はアリストテレスに於ては觀照的政治的享樂的の三形式として繼承せられた。但しプラトンは於ける哲人の生活はイデアの觀照と同時に國家の支配を使命としたのであるが、アリストテレスにあつては觀照生活はそれ自體獨立して最高位を與へられたのである。但し既に述べた如く意欲に於ける追求忌避が認識に於ける肯定否定を豫想するといふ主知主義的見解によれば、實踐的生活は觀照的生活を前提としてゐる。唯觀照が實踐から獨立して自己目的となつた場合をアリストテレスは最高生活としたのである。觀照的生活と實踐的生活とに對立して第三の創作的生活は自然や人生の事實を種々の表現手段を通して模倣する所の藝術生活であつて、その模倣の對象と手段とに應じて種々に小分せられるのであるが、併しそれ等は何れも倫理的の目的を有する點に於て實踐的生活に關係し、また一種の眞理認識である點に於て觀照的生活に關係する。即ち藝術が刺戟し喚起する情緒特にも悲劇に於ける恐怖や同情は、それによつて精神の「淨化」³⁾を行はんがためであり、また藝術はそれが描寫する個別的事象に於て

- 1) Poietika. IX. 1451 b. 2) φαντασία. 3) ἐπιστήμη. 4) ὁρεξίς.
5) βούλησις. 6) τέλος. 7) τῆ γὰθόν. 8) εὐδαιμονία.
9) τὸ εὐδαιμονεῖν. 10) τὸ εἶ ζῆν καὶ τὸ εἶ πράττειν.

一般的本質を明かにするもの、即ち個別的事象に實現せる一般的本質をその對象とするものであつて、そこに學問と同様の使命を有し、且認識に伴ふ快樂がそこにも生ずるのである。¹⁾創作的活動は斯くの如く實踐的並びに理論的活動と特殊の關係を有しながら、而もそれ等の何れにも從屬せざる第三の領域を占めてゐるといふのがアリストテレスの見解である。何れにせよ、統制原理としての能動的理性は、人間の自然的機構に制約されたる受動的理性に働きかけるのであつて、それによつて、感覺より來れる表象²⁾は認識³⁾となり、動物的なる衝動⁴⁾は人間的なる意志⁵⁾となる。斯くして要するにアリストテレスの心理說によれば人間が質料を形相によつて統制することは畢竟人間に於ける動植物的なる感覺や欲望を人間特有の理性によつて統制することであり、こゝに形而上學的原理は心理學的內容を與へられ、その教育的意義は一層具體的に暗示せられるのである。この事は併し直ちにアリストテレス倫理學の基礎であり、それを介して教育固有の論究は始まる。

アリストテレスの倫理說と教育 アリストテレスに於ても亦希臘人一般の見解と同じく、人生の究極目的は善⁶⁾に存し、善とは即ち幸福⁸⁾の外ならず、そして「幸福であること」⁹⁾はやがて「善く生き善く爲すこと」¹⁰⁾である。然しあらゆる生物はそれに固有なる本性活動の發展によつて幸福になるものであり、人間に固有なるものは前述の如く理性であるが故に、人間の善

- 1) ψυχῆς ἐνέργεια κατὰ λόγον. 2) εἴξις. 3) ψυχῆς ἐνέργεια κατ' ὁρετήν. 4) ἐν πᾶσιν ἢ μεσότης ἐπαινετόν. (Ethika N. II. 7.)

は結局理性に従へる魂の活動¹⁾に存する。換言すれば理性が行動の正しき原理を洞察し、それによつて欲望を統制するのが人間の善である。然しこの場合にアリストテレスは理性的知見に基ける意志をば、ソクラテスに於けるが如く直ちに行動化する程に強きものと考へず、却て欲望の強さがこれを妨げ易き事實に着眼して、理性的活動は反復修練して習慣化する必要があると考へた。徳とは實にこの理性的活動の「習慣²⁾」に外ならぬが故に、人間の善はまた「徳に従へる魂の活動³⁾」である。而も斯かる徳は本來人間の自然的素質に可能態として存し、理性の働きによつて實現するものであり、その結果として快樂を將來するものである。斯くの如く理性が欲望を統制することによつて成立する徳をばアリストテレスはまた「中庸」の語を以て指示し「あらゆるものに於て中庸が賞讃せらるべきである」としてゐる。「中庸」はさきに知覺を統一する原理として指摘せられたのであるが、こゝでは欲望を統一する原理となつてゐる。アリストテレスはこの實踐的原理としての中庸をば兩極端に對して特色づけ、例へば勇氣の徳は暴勇と卑怯との中間に成立すると説いてゐるが、併し吾々はこれを飽迄も本來の統一原理として解釋し、徳をば欲望の矛盾を辨證的に止揚統一することによつて他の欲望と矛盾衝突する場合に生ずるものであり、この一方的偏局を是正して對

- 1) Eth ka N. I. 4-7. 2) Politika VII. 13.
3) φύσις. 4) ἔθος. 5) ἦθος. 6) λόγος.

立的欲望をば、人の本性の發揮のために止揚統一することこそ勇氣に外ならぬであらう。斯く解釋するときは、さきに質料と形相との——自然的素質と價値的理念との——辨證的關係として把握された陶冶の本質は、こゝでは矛盾する質料の辨證的統一として理解せられる。何れにせよ、實踐的理性が自然的素質、動物的意欲としての衝動を統制する所に善が存し、この統一を習慣化する所に徳は成立するのであるが、斯かる倫理説はそのまゝ、教育論²⁾に結合し、こゝでは上述の趣旨が形を變へて次の如くに述べられてゐる。即ちアリストテレスによれば人をして有徳ならしめる要件が三つある。第一は「自然³⁾」であつてそれは心身兩面に人間的天性(素質)を與へ、第二は「習慣⁴⁾」であつてそれは天性を修練して「習性(品性)」たらしめ、第三は「理性⁵⁾」であつてそれは善を認識し至當の指導原理を得しめる。生物の大部分は天性のまゝに生活し、若干は習性をも有するが、理性は人間特有の能力であるが故に、人間としての善、即ち幸福は、前述の如く理性が天性を指導して習性を形成するにある。而して教育の關する所は習性と理性とであつて、示教によつて理性に正しき識見を得しめ、練習によつて善き習性を養ふのがその主眼である。吾々はさきにソクラテスの助産術に於て、素質と教導と長期間の切磋琢磨とが要件とせられてゐることを指摘したのであるが、今アリストテレスに於ては上來の叙述が示す如く、形而上學的、心理學的所説を背景とし、倫理學的見解に即し

て、これ等教育の主要契機が整頓されてゐるのを見るのである。因にアリストテレスはこの場合習性の陶冶に善への共通の追求者としての交友の重要性を認め、友情¹⁾は人生の要求であるのみならず、望ましき理想であり、善き人々の交際は一切の善の源泉であることを力説してゐる²⁾。これは古來の希臘社會の風習やソクラテス、プラトン教育思想の基調たりしエロスの價値を認めてそれを繼承せるものであるのみならず、既述の如く、アリストテレス自らがアカデメイアの學友との間に體驗せる温かき友情を反映せるものと思はれる。但し彼が先輩と後輩との同性愛の醜き方面を警戒して、これを不自然な病的な状態であると非難したのを見れば、當時愈々世上一般の風紀が紊亂して純精神的なるエロスの行はれざるに至つた世相を想察することが出来る。

アリストテレスの國家論と教育 アリストテレスによれば人は「本性上國家的生物³⁾であり、翻つて國家の幸福はその成員の幸福によつてのみ得られるが故に、國民の教育は國家の學たる「政治學」の規定すべき所であり、少青年の教育が立法家の最大の關心事であるべきことは何人と雖も異議はない筈である⁴⁾。茲でもプラトンに於けると同様に、國家の任務をば國民の教育に置き、國家と教育とを不離の關係に考へる古典的希臘思想が現れてゐる。但しアリストテレスによれば、各人の徳が夫々の自然的素質の上に形成せらるべきである様

1) φιλία. 2) Ethika N. VIII. 1. 3) φύσει πολιτικὸν ζῷον.
4) Politika. VIII. 1.

1) ἦθος. 2) τὴν παιδείαν μίαν καὶ τὴν αὐτὴν. 3) ἀσχολία.
4) σχολή. 5) τὰ ἀναγκαῖα καὶ κρήσιμα. 6) τὰ καλὰ.

に、國家も亦各々の歴史的事情に即して國家の使命を果さねばならぬ。従つて政體もプラト¹⁾ンに於ける如く端的に理想的政體と反理想的政體とに區別せらるべきではなく、支配者の數から見て同一の外形を具へてゐても、それが公共の道德的幸福を目ざすか否かによつて善き政體とも惡き政體ともなる。例へば一人の支配は善き王制とも惡き暴君制ともなり、少數者の支配は善き貴族政體とも惡き寡頭政體ともなり、全國民の支配は善く秩序づけられたる共和政治ともなり、惡き愚民政治ともなる。而してアリストテレスは國民の特性¹⁾が夫々独自の國家形態を維持し、それに適應せる教育を國民に課することを述べてゐるが、併し同一の國家にあつてはその全國民が同一の目標に向つてゐるが故に、全國民が同一の教育²⁾を受くべきことを説き、統一的國民教育の原則を明示してゐる。そしてこの原則の根柢には、國民各自が自己を自己のものとして考へず、全く國家のものとして考へねばならぬといふ國家主義が高調されてゐる。この點に關する限り、彼はスパルタ教育を讚美する人を至當と認めた。但しその教育の内容に就いては次の如き所説を加へてゐるのである。

一般陶冶と職業陶冶 アリストテレスによれば生活には「多忙³⁾の爲のもの」と「閑暇⁴⁾の爲のもの」がある。前者はまた戰の爲、後者は平和の爲であり、更に前者は「必須有用のもの⁵⁾」を目ざし、後者は「美しきもの⁶⁾」を目ざす。換言すれば前者は自己一身の生計や國家の存立を保つ

爲の經濟的並びに軍事的な生活であり、後者は平和と閑暇とを學問や藝術に送る生活である。前者は謂はゞ奴隸的生活であつて、後者は自由人の生活である。而してアリストテレスによれば、戦は平和の爲であり、多忙は閑暇の爲である。故に彼は自由人としての教養をより高く評價し、經濟や軍事はその爲の地盤手段と考へたのである。スパルタの教育はこの點に於ては彼によつて非難せられてゐる。所謂自由教育¹⁾の本來の意義は生活の爲の多忙を離れて閑暇を美しく過す爲の教育に存する。而して後世に所謂職業陶冶と一般陶冶とに關する思想は實にアリストテレスのこの思想に淵源するのである。

アリストテレスは上述の生活の二方面をば徳目や教科目を論ずる際にもその背景たらしめてゐる。即ち彼によれば勇氣と忍耐は多忙戰の爲に、學問は閑暇平和の爲に、節制と正義とは兩方の爲にはあるが、特に閑暇平和の爲に必要である。教科目に就いても、例へば讀書は生活の必要を充すと共に他の教養を得る基礎となり、圖畫は實用の外に美感を養ふものであり、體育は勇氣の涵養を目ざし、音樂は「單に多忙を正しく過すのみならず、閑暇を美しく送る爲に課せられるものとした。」²⁾

教育の段階 アリストテレスも亦プラトンの思想の基調に立つて、隨年教法的教育段階論を企てた³⁾。そして先づ出生前の優生學的考察から出發し、結婚の統制に就いて論じてゐる。

それによれば夫婦の年齢はその生殖力の齟齬のない様に又親子の年齢が餘りに隔たり過ぎたり接近し過ぎたりせぬ様に注意せねばならぬ。その爲には男子は三十七歳より女子は十八歳より結婚を許し、男子五十歳位を生殖に最もよき時期とし、而して男子七十歳、女子四十歳を生殖能力の限度としてゐる。兩親の身體は競技者の如く不自然に強きこと及び餘りに弱きことを共に非とし、中庸を可としてゐる。次に妊娠中の母親は身體に榮養と適度の運動を、精神に休息安靜を必要とする。不具の子供はこれを棄て、又法定數—國家の人口の制限より來る出産の限度—を超えたる産兒は成育せぬ中に處分せねばならぬ。初生兒は乳を以て育てるのが最もよく、酒類は禁すべきである。五歳までは格式ばつた學習や過激な作業を課することなく、但し運動は自由に行はせ、遊戯は下品なもの、骨の折れるもの、放縱のものを避けさせねばならぬ。物語に就いては兒童監督官の選定によるのがよい。七歳までは奴隸に交ることを禁じ親の許で教育すべく、凡て醜惡なる話や繪畫や演劇等に接せしめてはならぬ。七歳から十歳までは音樂や學問のみを教授し、十歳以後二十一歳に至るまではその外に嚴重な體育と一定の食事とによつて教育して、性的惑亂を防ぎ又戰爭その他の身體的勞苦に慣れしめる。この間の教育が國家的見地から統一的に行はるべきこと、又その各徳目各教科が生活必須の見地と自由教育の見地とより教へらるべきこと等

に就いては既述の如くである。

アリストテレスの史的地位 プラトンに結合しながら而もプラトンの對比に於て希臘思想史上に立場を占めたるアリストテレスは、後世に於て呼出される場合にも亦プラトンの關係に於て、而も多くはプラトンと異なる特色の故に呼出された。彼の創始せる逍遙學派の傳統は後に述べるけれども、アカデメイアに次いで長き勢力を保ちながら、師祖の餘りに廣汎偉大なる業績の故に後繼者は概してそれを整理し校訂し保存することを主たる任務とせざるを得なかつた。中世期に於てはプラトン哲學を採用せるアンセルムスがスコラ哲學の發生を促せるに對して、アリストテレス哲學はトマス・アキナス¹⁾に採用せられてスコラ哲學の最盛期を將來した。これより先アリストテレスの著作はアラビアの學者——特に東方に於けるアヴィツェンナ²⁾と西方に於けるアヴェロエス³⁾——によつて研究せられ、それが猶太人の手を経て西歐に傳へられた。而も當初は異端として斥けられ、『物理學』は一二一〇年に『形而上學』は一二一五年に教會によつて禁書とせられた。然しやがて自然的眞理と宗教的眞理との分離を防止して兩者を結合することがスコラ哲學に取つて必要とせられるや、アリストテレスはまさにその用に立つものとして歓迎せられるに至つた。その新動向を導いてアリストテレスを基督教神學の基礎づけに採用したのが前述のトマス・アキ

1) Thomas Aquinas (1227-1274).

2) Avicenna (978-1036).

3) Averroes (1126-1198).

ナスである。スコラ哲學はやがて間もなく衰微したが中世の大學がまたアリストテレスの論理學及び其他の諸部門の研究を次第に重視するに至つた。文藝復興期に於ける希臘文化一般の復興の中にアリストテレスも勿論含まれてゐたのであるが、やがてそれに續ける宗教改革運動に於て特にメランヒトン¹⁾はアリストテレスの學の偉大なる包括力を禮讚し、その研究を力説した。最近の哲學——殊に所謂獨逸學派——がマルブルヒ學派や西南學派のプラトン主義に對立してアリストテレスにより多く依據することにより、新生面を開拓しつゝあるのは周知の事實である。教育界に於ても亦ナトルプのプラトン主義に對して、例へばヴィルマン²⁾の如き有爲の教育學者がアリストテレス教育思想の意義の闡明に努力し、自らの學說上にも少からざる影響を受けてゐる。

1) Melancthon (1497-1560).

2) O. Willmann (1839-1920).

第四章 新希臘時代第二期〔世界主義時代〕

第一節 希臘文化の世界化

世界主義時代 上の二章に述べた前後二期は舊希臘より新希臘への推移を含むとはいへ、何れも希臘文化が未だ世界的傳播と混化とに於てではなく、それ自らの地盤——希臘本土と希臘植民地——に於て、典型的に榮えた時期である。吾々がこの二期を併せて廣く古典時代と名づけたのはこの故である。然るにペロポネソス戰爭(前四三一年—四〇四年)はアテナイの覇權を失はしめ、コリントス戰爭(前三九五年—三八七年)はコリントスを衰微せしめ、テバイ戰爭(前三七九年—三六二年)はスパルタを敗退せしめ、つひにマケドニアの英主ピリポス二世がアテナイとテバイの聯合軍をカイロネイアの一戰(前三三八年)に破つて以來希臘民族の政治的獨立は失はれ、次いでアレクサンドロス大王の偉業を通じて彼等とその全文化とは本來の郷土を離れて、地中海を中心とする當時の主要世界に限なく傳播した。今や希臘民族は特定の都市國家の市民たることを失つて世界市民となり、而も世界を希臘化することによつて世界の師となつた。吾々はそれ故に、さきにも解明した如く、この希臘

1) *Xaipaveia*.

教育史最後の一期間をば、世界市民時代の意味に於て世界主義時代と名づけ、又史家ドロイゼンに従ひ希臘化時代の意味に於て希臘主義時代とも呼ぶ。



38. アレクサンドロス大王

希臘文化の世界的傳播 ホメロス詩篇への親熟によつて高貴豊饒な想念を養はれ、アリストテレスの直接指導によつて包括的な學的研究への興味と理解とを與へられたアレクサンドロス大王は、名實共に拔群の英主であつた。故に大王の遠征(前三三四年—三二三三年)は單に軍隊の遠征、政治的勢力の勝利ではなくて、學藝の遠征であり、希臘文化の世界征服であつた。すぐれた歴史家や地理學者や天文學者や藝術家や哲學者達が大王に伴はれて行つた。斯くして力と感激と知性とに充てる王師の進む所、波斯埃及等の老大國は破壊せられて新文化建設の地盤となり、狭き郷土に盛りを過ぎたる希臘文化は新鮮なる廣野に移植せられた。「希臘民族」と「異民族」との舊き障壁は撤去せられて、共通の言葉^{コスモポリテリス}を語る「世界市民」が萬里の山河を越えて握手した。吾々はこの大規模なる文化運

動をば先づその中心地によつて、把握し、同時にそれ等の教育的意義を考察しようと思ふ。

第二節 文化の中心地とその教育的職能

アテナイの諸學派 世界主義時代文化の中心地として先づ顧みらるべきは、舊き傳統を誇るアテナイである。そこにはイソクラテスの傳統を承けたる修辭學校と、プラトンを祖述せるアカデメイア學派と、アリストテレスを繼承せる逍遙學派とが共に世界の學府たる權威を有し、各地から優秀の徒を集めて講筵を賑はせてゐた。そこに又新しくストア及びエピクロスの兩學派が起り、舊學派に對抗して新説を唱道し、つひに世界主義時代の思想界を代表するに至つた。これ等の中イソクラテスの修辭學校に就いては既に述べたから茲には他の諸學派に就いて略述しよう。

アカデメイア學派 アカデメイアはその神域とギムナシオンとを繼續的不動産とし、曾ては反對せる報酬受領制度の採用によつて動産を獲得し、學頭¹⁾を中心に研究結社を成せる學徒を生ける力として、數百年間の命脈を保つた。(學頭の傳統は、勿論その間に斷續はあるが、他の如何なる學派よりも明確に傳へられ、紀元後五二九年ユスチニアヌス皇帝の命によるアカデメイア解散の時まで續いてゐる²⁾)。但しその間にも學的傾向に變遷があり、通常三

1) σχολάρχης 2) Ueberweg. Geschichte der Philosophie (Altertum) S. 667.

1) Σπεύσιππος (+334) 2) Ξενοκράτης (396-314) 3) Πολέμων (270)
4) Κράντωρ (260) 5) Κράτης 6) Ἀρκεσίλαος (315-241) 7) Καρνεάδης
(160) 8) Φίλων (100) 9) Ἀντίοχος (75) 10) Θράσυλλος. 11) Θεόφραστος
(370-287) 12) Ἠθικοὶ χαρακτῆρες. 13) Εὐδημος.

期に小分せられる。第一期は所謂古アカデミーであつて、プラトンの甥スベウシポス¹⁾、弟子クセノクラテス²⁾、それからボレモン³⁾、クラントル⁴⁾ (前二者の弟子)、クラテス⁵⁾ (ボレモンの弟子) が約百年間に互り相繼いで學頭となり、大體祖師の學的立場を忠實に踏襲した。第二期は所謂「中期アカデミー」であつて、その中が更に初期のアルケシラオス派⁶⁾と後期のカルネアデス⁷⁾ (前一五五年羅馬に在り)の派とに分れ、大體に於て懷疑主義の思想が支配した。第三期は所謂「新アカデミー」であつて、ラリサのピロ⁸⁾ (前八七年羅馬に在り) やアスカロンのアンテオコス⁹⁾ (前七八年キケロがアテナイでこの人に師事した) がこれを代表し、主として折衷主義の傾向を取つた。この新アカデミー派の末なるトラシムロス¹⁰⁾ (羅馬チベリウス帝治下の人) はプラトンの著作を整理し、三十六篇を四篇づゝ九卷に分けたが、この分類は今日に至るまで襲用せられてゐる。

逍遙學派 リュケイオンの所謂逍遙學派もアカデメイアと同様の物質的保證と人事的制度とによつて長き學統を保つてゐたが、中でも主なる代表者は次の諸學者である。テオプラストス¹¹⁾ はレスボス島のエレボス出身で、動植物學の造詣深く、又その著「性格論」¹²⁾ は性格學的研究の古典として注目すべき名著である。彼が學頭たりし時リュケイオンは二千人の學生を有してゐたと傳へられてゐる。エウデモス¹³⁾ はロドス島出身でアリストテレスの弟子中

最も傑出し、數學、星學の研究に功あり、又アリストテレスの倫理學講義を出版したものとして有名な「エウデミア倫理學」がある。アリストクセノスはタレンツム出身で音楽に關する歴史的並びに理論的研究に名高い。ディカイアルコス³⁾はシケリア島のメッサナ出身で有名な博學者であり、その著「希臘の生活」は希臘の地理、歴史、道德、宗教等を内容とする文化史的述作である。ストラト⁵⁾は小亞細亞のラムブサコス出身で自然研究の該博さに於て逍遙學派中第一であり、自然研究者の異名を以て呼ばれた。尙この派の末なるアンドロニコスはロドス島出身で羅馬に住み、アリストテレスの著作を整理し出版したことでも有名である。これより以後逍遙學派は祖師の著作の校訂、註釋、拔萃、解釋等を主なる任務として保守的機能を守るに至つた。

ストア學派 ストア學派の開祖はキティオン(キプロス島に在り)のゼノ⁸⁾である。彼は前三三六年頃に、富める商人の子として生れたが、難船して財を失ひ、前三一四年頃アテナイに來て哲學を諸學者(キニク派のクラテス、メガラ派のステイルボン、アカデメイア派のポレモン等に學び、前三〇八年にアテナイ市内の或る「彩色せられた柱廊」に於て講筵を開き、所謂「ストア學派」の祖となつた。彼の眞摯嚴肅なる性格、簡素なる生活、寡欲親切なる行狀は一代の尊敬を博し、多數の門下を集めた。彼は前二六四年に自殺したが學統は弟子クレアンテス¹⁰⁾

- 1) Ἡθικὰ Εὐδήμεια. 2) Ἀριστοῦξενος (318) 3) Δικαίαρχος.
4) Βίος τῆς ἐλλάδος. 5) Στράτων. 6) Physicus. 7) Ἀνδρόνικος (100)
8) Ζήνων (340-265) 9) στοὰ ποικίλη. 10) Κλεάνθης.

(トロアスのアソス出身)に傳へられ、更にその弟子クリュシポス(ギリキアのソロイ出身)に傳へられたが、この人によつてストア學派の思想は整備せられて永く傳へられた。是等にキオス出身のアリストン²⁾、バビロニアのディオゲネス³⁾等が加はつて「古ストア」を形成し、主として後述の如き倫理問題に研究を集中した。第二期は所謂混合思想⁴⁾の特色を現はし、その代表者パナイテイオス⁵⁾はロドス出身で、初めベルガモンに於てクラテスの教を受け、次でアテナイに出で上記バビロニアのディオゲネスの門弟となり、又アカデメイア中期の懷疑思想にも強く影響せられた。後に羅馬に行つて知名の政治家と交り、それによつてストア學説は羅馬に移入せられた。同じく第二期ストア學派の代表者ポセイドニオス⁶⁾はシリアのアパミア出身でアテナイに學んだ後諸地方を遍歴し、ロドス島に居を構へてそこにストア學派を榮えしめた。古代第一の博學者で特に地理、歴史の研究に偉績を遂げた人である。キケロもロドスに旅行せる時彼に教を受けた。第三期ストア學派は宗教的傾向を帯びて行つた。

エピク로스學派 エピクロス學派の開祖エピクロス⁷⁾は、前三四一年頃アッティケ州に生れたが幼にしてサモス島に伴はれたために通常サモス出身者とせられてゐる。十八歳の頃アテナイに出てアカデメイアにクセノクラテスの教を受け、又デモクリトスやピュロソンの學説をも學んだ様である。後ミュティレネ、及びラムブサコスで哲學の講筵を開いたが、前三

- 1) Χρύσιππος. (280-209) 2) Ἀριστων. 3) Διογένης. 4) Synkretismus.
5) Παναίτιος (180-110) 6) Ποσειδώνιος (175-90) 7) Ἐπίκουρος (341-270)

○六年に再びアテナイに来て、有名な庭園——所謂「エピクロスの庭」——を買受け、そこに學園を開いて死(前二七〇年)に至るまで靜かな研究教授生活を送つた。彼は洗練された趣味と明朗な社交性とを有する典型的都人士であり、後述の如き上品な快樂主義思想を體現した人である。エピクロスの學派の代表者中主なる者は、ラムブサコス出身のメトロドロス、シドン出身のゼノノン、ガダラ(パレスティナに在り)出身のピロデモス等である。

アテナイの大學 アテナイには上述の如き諸學派が或は傳統に據り或は新興の意氣を以て競ひ榮えたのであるが、これ等特に哲學の四學派を併せてアテナイの大學と呼ばれる。これ等の學校に於ては、學頭は初め先任者の指名によつて定められたが、やがて學生又は教職員(中の評議員ともいふべきもの)によつて選舉せられることとなり、更に羅馬時代に入つては、地方官若くは皇帝が任命することとなつた。學頭の外に下級の教師や助手があつて、正科を教授したり、或は豫備的課程を擔任したりした。學生は「エプテボス」といふ組合を作つて寄宿舎に住み、そこから學校に通ふのを常としてゐた。前二〇〇年頃戰亂によつて學園が破壊せられてから、學徒は市内のギムナシオンや劇場に集まつて研學を續けた。

羅馬皇帝ウエスパシアヌス⁶⁾以來アテナイの大學も國庫の支出を受けることとなり、ハドリウス帝やアントニウス帝⁸⁾も熱心にこれを支持したため、學運大いに榮え、當時の羅馬人士

- 1) Κήποι 'Επικούρου. 2) Μητροδωρος (+277) 3) Ζήνων.
4) Φιλόδημος (Contemporary with C cero) 5) Ἐφηβος.
6) Vespasianus (r. 69-79) 7) Hadrianus (r. 117-128) 8) Antonius r. 138-180)

の教養の中心地となつた。教授の方法や學生の生活等に於て中世の大學のそれと事實上の連續はなかつたけれども軌を一にするものが多かつた。然し東羅馬帝國のユスチニアヌス¹⁾皇帝がアテナイの大學をば、基督教に反對することの故に、閉鎖を命じた(五二九年)時を以て、この長き學的傳統は中絶したのである。(近世に於けるアカデメイアの再興に就いては後の卷に述べるであらう。)

アレクサンドレイアの學府 世界主義時代文化の中心地として、アテナイにも優つて著名なるはアレクサンドレイア²⁾である。そこではプトレマイオス³⁾王家が前三二三年より前三〇年に至るまで支配し、アレクサンドロス大王の遺志を繼いで、この首都を世界文化の中心たらしめるために盡瘁した。第一代プトレマイオス⁴⁾は大王に従つて遠征し、大王歿後の紛亂を鎮めて、埃及に君臨したのであるが、その晩年は内治に専心し、文教の興隆に盡力した。第二代プトレマイオス⁵⁾は、その長き平和の治政に於て文化の保護勸奨に主力を盡し、有名な研究施設を創建した。それは古くより存した埃及の施設に倣つたもので、一個の學園⁶⁾と、二個の圖書館⁷⁾とから成る。學園は學藝の神ムサの社殿の周圍に建てた研究室の一群で、そこに各方面の學者が公の給費を受けて研究に従事し、相互の切磋に資したのである。この學園に直接附屬してブリュケイオン⁸⁾圖書館があり、更に都市の一隅に

- 1) Justinianus (r. 527-567) 2) 'Αλεξάνδρεια. 3) Πτολεμαίος.
4) Π. Σωτήρ (r. 323-285) 5) Π. Φιλαδεργός (r. 285-247) 6) Μουσείον.
7) Βιβλιοθήκη. 8) Βρυχείων.

- 1) 'Ιππαρχος (160-125) 2) 'Ερατοσθένης (276-194) 3) 'Αριστοφάνης (262-185) 4) 'Αρίσταρχος (222-150) 5) 'Εὐκλείδης (323-283) 6) 'Αρχιμήδης (287-211) 7) 'Ερόφιλος (323-285) 8) 'Ερασίστρατος (300-260) 9) Γαλῆνος (2d cent. A. D.)

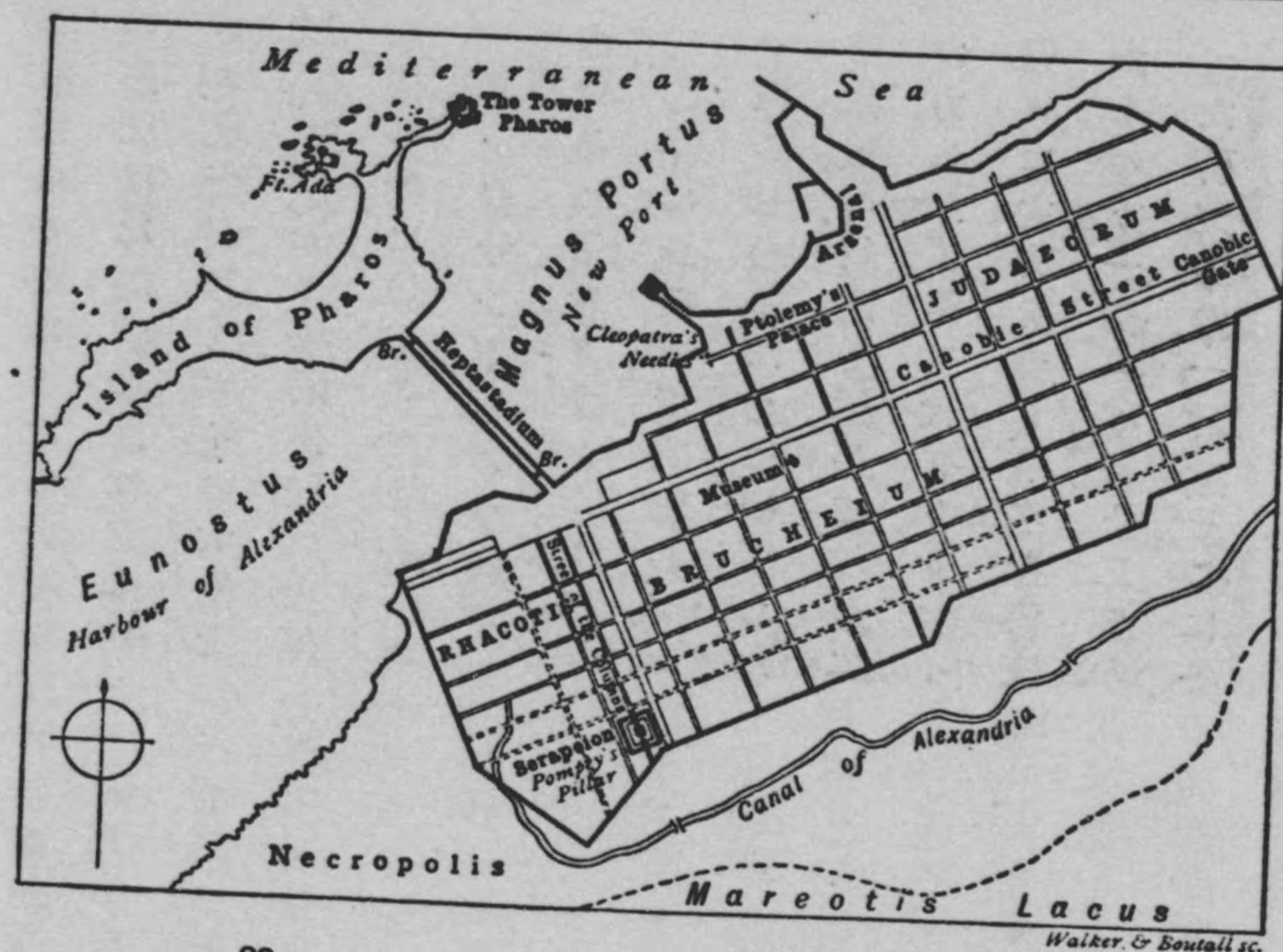


40. ペルガモンの公共營造物

て地球の周囲及び直徑、太陽及び月の距離春分秋分等が知られ、近世コペルニクスの出現まで長く天文学上の通説を成して來た。この學說の唱道建設に最も功績のあつたのはニカイア出身のヒパルコス¹⁾である。第二に文法・文献學の發展も注目すべく、原典批判や註解が大に行はれ、この方面の代表者として、エラトステネス²⁾、キュレネ出身のアリストプロネス³⁾、ビザンティオン出身のアリスタルコス⁴⁾、サモトラキア出身等の名が目立つてゐる。第三に數學及び自然科学の發達が顯著であつて、幾何學のエウクレイデス⁵⁾(出身地不明)、物理學のアルキメデース⁶⁾(シラクサイ出身)、醫學のヘロフィロス⁷⁾(カルケドン出身)、エラシストラトス⁸⁾、ケオス島出身、ガレノス⁹⁾(ペルガモン出身)等の名がこれを物語つてゐる。

アレクサンドレイアは斯くの如く殷盛なる文運を以て當代に輝き、つひに文化史上の所謂「アレクサンドリア時代」の名は、他の諸中心地をも含めて、廣く世界主義時代一般を指すに至つた。而もこの學

- 1) Σεραπείον. 2) Π. Εὐεργέτης (r. 247-222) 3) Π. Φιλοπάτωρ (r. 333-205) 4) Kappes, Lehrbuch der Geschichte der Pädagogik I. S. 179.



39. アレクサンドレイアの平面圖

セラペイオン¹⁾圖書館があつて、この内外兩圖書館に希臘を始め埃及猶太等の諸文獻が蒐集せられた。第三代プロトレマイオス・エウエルゲテスはアリステレス²⁾著作の寫本及び猶太埃及その他東方諸國の文獻の蒐集に功があり、第四代プロトレマイオス・フィロパトル³⁾は希臘の遍歴學者をしてアレクサンドレイアを訪れたる場合には必ずその所藏文獻の寫本をその圖書館に遺さしめた。斯くして紀元後三世紀頃に於ける藏書數は兩圖書館を合して約五十三萬二千八百卷に達したることである⁴⁾。

アレクサンドレイア學府に於て發展し若くは新興した學術の主なるものは、第一に所謂「プロトレマイオス天文学」であり、それによつ

都は基督教興起後には希臘思想と猶太教及び基督教との結合の場所となり、紀元後六四〇年に回教徒の侵入によつて壊滅するまで約千年の長きに亙つて世界文化の一大中心地となつてゐたのである。

ベルガモン其他の中心地アレクサンドレイアに對して小亞細亞のベルガモン¹⁾も亦學藝の中心地であつた。こゝでも國王アタロス一世²⁾及びエウメネス二世³⁾が、ブトレマイオス王家との競争意識から國都ベルガモンに圖書館を設け、二十萬卷の文獻を藏して學藝を奨励した。こゝではアテナイに比較的接近してゐることから、修辭學及び美術批評が發達した。右の外更にシリアのアンティオケイア⁴⁾、キキリアのタルソス⁵⁾、エーゲ海中のロドス⁶⁾、マケドニアのペラ⁷⁾等も夫々國王の保護によつて文化の淵藪となつたのである。

第三節 思想界の大勢とその教育的意義

世界主義時代の思想界周知知られてゐる通りこの時代の思想界を代表するものは既述のストア學派及びエピク로스學派に懷疑派を加へた三學派である。これ等は希臘哲學史上に所謂倫理時代を形成し、その共通の目標は國家の興亡、民族の變轉の渦中に不安と焦燥を抱ける彼等が人生の幸福を探索し安立の境地に住することに存した。而もその到

- 1) Πέργαμον. 2) Ἀτταλος I (241-197) 3) Εὐμένης II (197-159)
4) Ἀντιόχεια. 5) Ταρσός. 6) Ρόδος. 7) Πέλλα.

達し得た歸結が次に述べる如く、亡び行く希臘の運命をよく反映せる所に時代の共通特色を示してゐる。吾々はこの特色に注意しながら彼等の思想中特に教育的見地より重要と思はれる契機のみを略述したいと思ふ。因に茲に参照せられる資料は主としてディオゲネス・ラエルチウスのゾエノーン、エピクロス、ピュロロン及びティモンに關する所傳である。

ストア學派の思想 ストア學派は當初の間はキニク學派の立場に結合して、専ら外面的幸福に對する無關心、有徳なる賢者の「自己満足」²⁾を道德原理としたけれども、やがてアリストテレスの心理説に依據して、而もより強く個人精神に於ける理性の統一性と獨立性を主張し、こゝに理性による情欲の否定即ち「無情欲」³⁾の倫理を樹立するに至つた。ストア學派に取つては精神の「指導力」⁴⁾は理性であつて、それは單に個々の感覺刺戟を知覺に統一する機能だけでなく、感情の興奮に「同意」⁵⁾を與へて之を意志活動に變化せしめる機能をも有する。この場合に感情の興奮が餘りに強くて理性の同意を強制した状態、換言すれば精神が外界刺戟に動かされ受動的地位に立つて生じた所の状態が「情欲」⁶⁾であつて、それは病的な反自然的、反理性的な「心のみだれ」⁷⁾である。故に賢者は、假令外的世界の經緯をば如何とも爲し難いとしても、それによつて起された情欲に身を委せず居ることは出来るのであつて、この「無情欲」が即ち賢者の徳である。斯くして賢者は自己の情欲の克服により、翻つて外界を克服す

- 1) D.og. Laert. VII. Zenon; IX. Ryrrhon, Timon; X. Epikouros.
2) αὐτάρκεια. 3) ἀπάθεια. 4) τὸ ἡγεμονικόν. 5) συγκρατάσεις.
6) πάθη (affectus) 7) ταραχῆ (perturbationes)

ることが出来る。即ち外的運命の惹起する快苦は賢者も之を感受せざるを得ないのであるが唯快を善となさず、不快を惡となさず、要するに感情に同意を與へざることによつて、自己満足の誇りを保つことが出来るのである。

初期のストア學派は斯くの如く情欲への屈服を唯一の惡とし、情欲の克服を唯一の善としたのであるが後期のストア學派は斯かる絶對的善惡の中間に相對的善惡を立て、嚴肅主義を緩和した。即ち「望まじきもの」は善を促進する性質の故に第二次的善であり、「嫌ふべきもの」は善を妨害する性質の故に第二次的惡であるとし、「唯望まじきもの」と「嫌ふべきもの」との中間に位するものゝみが善惡に對して絶對的に無關心なるものであるとしたのである。この緩和は教育上に重要な意義を有する。何故ならば初期の嚴肅なストア思想によれば、人間は情欲を支配する賢者か情欲に屈服する愚者かの何れかであつて、その兩極の中間者は存在し得ないのであるが、緩和されたるストア思想に於ては、賢者から愚者への移行行きは漸進的であつて、兩極の中間に「改善の餘地あるもの」即ち「進みつゝある者」が存在し得るからである。尤もこの場合にストア學派は斯かる中間者が完全なる善に達するのは突然の轉向によると説明した所に、教育による漸進的向上を否定したのであるが、ともかく道徳的狀態の「進歩」を承認したことによつて教育論にまでは正展開せらるべき餘地を生じ

- 1) προηγμένα. 2) αποπροηγμένα. 3) ἀδιάφορα. 4) προκόπτων.
5) προκοπή

たのである。

上述の如きストア學派の倫理説は世界に關する形而上學的神學的思想に支へられてゐる。彼等によれば情欲は「反自然的なるもの」であり、理性は世界並びに人間の「自然」である。即ち「自然」は第一に創造的世界力、合目的の世界心としての「理性」であり、而もそれは彼等に取つては同時に神であり、世界の一切を生産し形成する所の「生成的理性」である。そしてこの理性こそやがて世界を合理的に秩序づける所の「法則」である。斯くて古來相對立する原理とせられて來た所の「自然」と「法則」とはストア學派に於ては、それ等が共に「理性」であることによつて一に歸する。故に「自然」に合致して生活する、といふ彼等の原理は同時に「理性」に従つて生活することである。情欲からの解放たる「無情欲」の原理も、情欲が理性を惑亂し世界の自然法則に背反するが故である。

斯くの如き世界觀と倫理説とが國家論に結合することによつてストア學派の時代的特色は益々明かになつて來る。彼等によれば個々の人間の精神はその理性に於て世界の本性と本質的に同一であるが故に、各個人は本性上共同生活をなすべきものである。この共同生活は併し彼等に於ては神をも全人類をも一つに結合する「全體的共同社會」としての世界國家である。それは専ら同一の世界理性の分有の故にのみ生ずる結合であつて、それ以

- 1) παρά φύσιν. 2) φύσις. 3) λόγος. 4) λόγος σπερματικός.
5) νόμος. 6) τὸ ὁμολογουμένως φύσει σῆν. 7) τὸ κατὰ λόγον ζῆν.
8) πολιτικὸν σύστημα.

外の結合原理を含まざるが故に、歴史的制約や國民的階級的差別を超えた全人類の理性的國家である。アレクサンドロス大王の偉業を通じて惹起された全世界の水平運動—希臘民族と異民族との久しき障壁を撤去し、自由民と奴隸との對立をも消去し、東西の諸國を一つに融合する世界國家運動—といふ文化史的動向は偶々ストア學派の國家思想に反映し、又彼等の形而上學によつて基礎づけられたのである。而も斯かる世界國家の思想は若し現實に世界を支配しつゝある大國民によつて受取られるならば、自らの使命の誇りある自覺となるのであるが、現實の政治的勢力を失つて亡國の途上にある國民に受取られるならば、それは如何なる特定の國家形態にも政治的職責にも積極的關心を有せざる冷淡無關心の態度として現はれるであらう。後者の場合には世界主義はそのまゝ個人主義である。ストア學派の國家思想が羅馬盛時の思想家—例へばキケロー—に於ては羅馬國法の積極的基礎となつたのに對して、希臘末期の思想家に於ては消極的なる個人主義となつたのはそのためである。

エピク로스學派の思想 エピクロスはキュレネ派の思想を承けて「快樂」を最高善としたのであるが併し瞬間的快樂よりも永續的快樂を優れるものとし、そして永續的快樂をば精神の「平安」²⁾即ち「安靜なる快樂」³⁾に求めた。更にエピクロスは快樂を最大ならしめるためには、自

- 1) ἡδονή. 2) γαλήνησμός. 3) ἡδονή καταστημική.

己の欲望とそれの遂行によつて生すべき結果とを比較考量する所の「知見」¹⁾を必要とした。この見地より彼は人間の要求を三種類に分けた。第一種は「自然に生ずる要求」²⁾即ち生存のために絶對必要であつて賢者と雖も避け得ざる要求であり、第二種は「人定的に作り出されたもの」³⁾世俗的名譽の如きであつて、賢者はその無價値を洞察し、それから脱却せねばならぬ。第三に上の二種の中間に、自然的ではあるが併し生存に必須ではない所の要求が存する。賢者は已むを得ない場合にはこれをも斷念せねばならぬが併し成る可くはこれを享樂すべきである。エピクロ



41. エピク로스

スの獎める快樂は斯くして結局人間の本性に根ざしながら衣食住の如き必需生存のものにあらざる快樂である。彼はこれをば洗鍊された美的生活と、親切高雅なる交友とに求めた。要するにそれは外界の運命に煩はされず、調和平衡の取れた衣食住と心情とによつて靜かに世界と人生とを觀照し享樂する生活であり、彼の言葉に従へば「肉體的に苦痛なく精神的に煩累なきこと」⁴⁾一言にし

- 1) φρόνησις. 2) φύσει. 3) νόμῳ.
4) μήτε ἀλγεῖν κατὰ σῶμα, μήτε ταραθεσθαι κατὰ ψυχήν.

て所謂「みだされざる状態」¹⁾である。

エピク、ロス學派は斯かる立場より宗教を排斥し、迷信からの妄想をば學問によつて征服すべきことを勧めた。神が人間生活や事物の運行に干渉するかの如く信ずるのは彼等によれば嗤ふべき蒙昧である。但し彼等はその標榜せる美的生活の理想を神話化するため、神々をば人間に類する巨大なもので、地上の萬象に煩はされず、世界の中間(中空)に精神的共同結社を成し、觀照といふ淨福な生活を送つてゐる様に想ひ描いた。

淨福な精神的共同結社も本來自己満足を求める個人的要求から生れたものであるが、この思想はエピク、ロス學派の國家觀に於て更に明かに現はれた。彼等に從へば國家とは個人が各自の利益を考量して「契約」²⁾を結ぶことにより成立したものである。従つて國法も、共同の利益に關する合意³⁾から生れ、而もこの場合により優れた智力を有する者は勢ひ自己の利益になる様に合意を導くが故に、結局國法は優者の利益のために制定せられるものである。行爲はそれ自體に於て正不正があるのではなく、唯各人の利益となることが正であり、不利になることが不正である。國法に違背して罰を受けるのは不利であるが故に不正である。而して國政に執る者は斯かる不正に陥り易く、不斷に斯かる罰を恐れて暮す。それ故に人は出来るだけ政治への關與を避くべきである。

- 1) ἀταραξία. 2) συνθήκη. 3) σύμβολον τοῦ συμφέροντος.

- 1) Πόρρων (368-275). 2) Τίμων (320-230) 3) Αἰνησιόδημος.
4) Sextus Empiricus (3. cent A. D.) 5) πιθανότης. 6) ἐποχή.

エピク、ロス學派は人間の教養に關しても亦上述の如き生活理想に資するもののみを認めて他を排斥した。彼等に取つて必要な教養は眞理の根源規準を知るべき論理學、認識論と宇宙の理法を知つて神々や自然現象や死に對する迷信的恐怖を除くための自然哲學と、人生の使命を知るための倫理學とであつて、其他の諸教養は無用であり、古來希臘教育が尊重して來た音樂、數學、天文學等もこの見地から廢棄せられたのである。

懷疑派の思想 ストア學派の思想がキニク派より發展し、エピク、ロス學派の思想がキュレ、ネ派に結合せる如く、懷疑派の思想はソピステスの傳統を受けたものである。懷疑派はその思想の性質上特定の學派を形成することは出来なかつたけれども、通常初期懷疑派の代表としてエリスの人ピュロン¹⁾とその弟子ティモン²⁾(プリオスの人、後アテナイに住む)とが挙げられ、「中期懷疑派」としては既述の「中期アカデミー」に屬するアルケシラオスとカルネアデースとが挙げられ、「後期懷疑派」としてはアイネシデモス³⁾(クノッソス出身にしてアレクサンドレイアにて教授せる人)及びセクストゥス・エムピリクス⁴⁾(希臘の哲學者、醫學者にしてアレクサンドレイア及びアテナイに住む)が挙げられる。吾々はこれ等の人々の所説を個別的に叙述する餘裕はないが、要するに彼等はあらゆる方面より認識上の眞偽及び實踐上の善惡に關する絶對的標準を否定して、唯それ等の「蓋然性」⁵⁾のみを許し、それ故に「判斷中止」⁶⁾によつて一切の

積極的斷定や去就を避け、唯便宜上慣習法律に従ひ、斯くして「無欲求」¹⁾「平靜」²⁾の状態にあるべきことを説き、つひに一切の教育の可能性をすら否定したのである。

世界主義時代思想界の全體的特色以上三學派は夫々その標榜する根本原理——理性と快樂と懷疑——を異にしなから、なほ共通の特色を具へてゐる。それは即ち個人主義と消極的なる禁欲主義である。アレクサンドロス大王によつて世界國家の建設が試みられたけれども大王歿後の世界には誰一人この大抱負を繼承し實現するだけの實力を有せず、大王の部下の諸將に分割された世界の何れの國家も國家としての隆盛を示すに至らなかつた。斯かる世相を背景として人々は最早祖國への關心を失ひ、只管に自己一身の安慰のみを念願した。ストア學派が世界觀の根柢に立つて世界國家を主張してもその本質は個人主義に外ならず、エピク、ロス學派が唱へた國家契約説も固より個人主義から考へ出されたものであり、懷疑派に至つてはその思想の本質上國家への積極的貢獻の如きは思ひも及ばぬものであつた。斯くして共通に立脚せる個人主義の地盤は同時に禁欲主義の成果を齎らした。ストア學派は理性によつて情欲を克服し、エピク、ロス學派は快樂の考量によつて情欲に「みだされざる状態」に逃避し、懷疑派は善の絶對的標準を否定することによつて便宜的なる「平靜」に安住した。すべての歸する所は、進んで求めず、敢て爲さざる消極的退姿的態度で

1) ἀπάθεια. 2) πραότης.

ある。建國創業期より古典時代にかけての希臘民族が祖國と同胞とに強き關心を寄せ、團結と犠牲とを高き徳と仰ぎ、體育音楽の基礎的陶冶軍事の修練科學的研究哲學的教養のすべてをば、單に個人としてのみならず國家の一員として、強く美はしく賢く善き人たらんがために修養せることに比較して、今や實に希臘民族は救ふべからざる老衰期に入つたのである。この憂ふべき事態は既にその傾向の萌し初めたる古典時代後期に於て、ソクラテス、プラトン等の經世的思想家が身命を堵し、生涯を貫いて警醒の教説を高唱したにも拘らず、つひに挽回の効はなかつたのであるが、今や末期的病根の深刻さは、斯くの如き警醒の叫びをすら發し得ざるに至り、人々は唯衰亡の身を自ら慰めることのみになつたのである。

希臘より羅馬へ 衰へ行く民族をば強き思想も之を支へることは出來ない。況んや個人主義と禁欲主義とに逃避して一身の安慰を求める弱き思想は希臘民族を只管に滅亡の一路に誘つた。カイロ、ネイアの戰以來希臘はマケドニアの配下に屬し、アレクサンドロス大王の歿後希臘本土の諸國はマケドニアの羈絆を脱せんとして、アカイア同盟やエトルリア同盟の名の下に團結抗争を試みたけれども、久しく慣らされたる小都市國家の對立的傳統と、民族の一般的老衰とは、つひにその効を空しくし、前一四六年羅馬の將軍ムムニウスが

1) Mumnius.

コリントスを攻略してアカイア同盟を粉碎するに及び希臘本土は大羅馬の一屬領となつて、茲に全く希臘民族の政治的生命は絶たれた。

然しながら彼等の文化的生命は永遠である。羅馬國家の希臘征服は希臘文化の羅馬征服を容易ならしめ、捕へられたる希臘は猛き勝利者を捕へて、學藝を荒れたるラチウムに持込んだ。吾々は今や視點を西方に移して、世界史上無比の大國家羅馬の興亡を辿り、希臘文化の運命をもそれに併せて見守らねばならない。

結 語 希臘教育の全體的特質

希臘教育史を論述し終るに際し、吾々はこの間に於ける時代の小區分と種族的國民的性質とによる推移變遷にも拘らず、なほ全體として若干の共通なる特質を捉へることが出来る。そしてそれ等諸點は通常基督教文化に對立する異教文化として特色づけられるものに照應するが故に、吾々も亦この見地から、やがて來るべき基督教教育を豫想し、それとの對照によつて、希臘教育の全體的特色を概観したいと思ふ。(羅馬教育もこの點に關する限り異教文化の基調に立ち、唯この共通の基調の上にあるがら羅馬固有の面目により希臘教育から小分せられるのであつて、この見地からまた希臘教育の叙述に於て顧慮せられる。)

第一に吾々は希臘教育の陶冶理想として、世人が自然主義、現世主義、人文主義等の名を冠する所の特色を承認しなければならぬ。人間天賦の性能を禁斷抑壓することなく、寧ろそれを肯定し、積極的に、但し調和的に發展せしめて、(自然主義、健康や富や名譽などの地上的財寶を獲得し、更に善美真正なる價值をその智情意の上で體現して、此の世ながらの幸福を齎らさんとすること、現世主義は、)スパルタの如き例外はあるにしても、希臘的なる生活理想の一般的徵表であり、従つて希臘教育に於ける陶冶理想であつた。この事はやがて幸福の原因を人間に求め、人間自身の力によつてその理想に達することが出來ると考へる點に於て人間本位である。人の力により人の本性を發展せしめて人の世に人らしき理想を實現し人としての最高の幸福に與らんとする思念を廣く、人文主義と解し得るならば、希臘的陶冶理想はまさに人文主義であると言はねばならぬ。若し又斯くの如きは「理想」といふよりも寧ろその一般妥當性、究極の課題性に於て「理念」と呼ばるべきであるとすれば、所謂「人文理念」こそ希臘教育の共通目標であつたのである。斯かる人文主義陶冶理念は、前史時代より古典時代前期にかけては無意識的に、(特にイオニア種族を代表とする)希臘民族の資性と傳統のまゝに、(追求せられ、古典時代後期に於ては、)特に全盛期のアテナイを中心として、意識的に高揚せられ、政治も藝術も哲學もこの理念の下に榮えた。世界主義時代には

文化の爛熟と民族の老衰とにより、反動的に消極主義禁欲主義となり、人文理念は凋落したのであるが、それはやがて希臘民族そのもの、現世的生命の衰亡に外ならなかつたが故に、翻つて希臘民族の繁榮は同時に人文主義の顯揚を以て特色づけられるのである。勿論希臘民族と雖も人間の外に神々を尊信し現世を超えて前世を、來世を、永遠を考へないではなかつた。然しその場合の神々は初期の素朴なる信仰に於ては頗る人間的に理解せられて善惡喜憂ともに人間に伍し、やがて洗鍊深化されたる信仰に於て超人間的優越性が歸せられても、それが人間の理性乃至精靈ダイモニアに顯現するものとして、内在的に把握せられ、その限りに於て、やはり人間本位たることを失はなかつた。自然の性情を罪惡とし、人の力を無力とし、現世をそれ自體では無價値のものとして、それ等を超克し、只管に超自然的超人間的超現世的なるものに憧憬歸依せしめんとする基督教的陶冶理想は未だ希臘教育の與り知らなかつた所である。

第二に希臘教育の人文主義はその根柢に於て主知主義に支へられてゐた。勿論希臘民族と雖も、建國創業時代は固より古典期衰頹期をも貫いて實踐的意志は旺盛であり、又特に審美的情操藝術的能力に於て彼等の面目は讚美せられるのであるが、それにも拘らず、彼等の意志と感情とを根柢に於て支配し指導してゐたものは理論であり、知的觀照力である。

彼等が美にして善なるものといひ、調和といひ、節度といひ、中庸といひ、又、永遠、常住、絶對をいふ場合に、當面の徵表は藝術的、道德的乃至宗教的なる印象を與へるものでありながら、それ等の希求を成立實現せしめる所以の原理は畢竟、理性であり、識見であり、智慧であり、眞智である。世界を支配する理性的原理——整然たる天體の運行や宇宙現象や數理體系や音樂の調律等を成立せしめるロゴスが人生をも支配するとき、換言すれば人間の理性が斯かるロゴスを把握して情意的なる感性パトスを支配するとき、そこに初めて望ましき人生が得られるのである。希臘精神を、例へばオデッセウスの聰明を代表として、その原始的初發狀態より特色づけ、就中古典時代の藝術や哲學によつて最高度に顯揚せられたものは、實に透徹し洗鍊された理性であり知性であつた。末期的症狀の希臘に於てすら、この知性は懷疑と逃避とに彼等を誘ふ主動力であつたのである。尤もそれ等諸相を通じて理性といひ、知といふのは必ずしも狹隘なる理論的認識のみではなく、實踐的理性をも含み、若くは主としてこれのみを指すことすらあつたのであるが、それにも拘らず、實踐智は自然宇宙數理等に對する理論的認識を背景として人間性活の原理を求めらるものであるから、結局は理論知に支へられてゐたのである。斯くしてプラトンやアリストテレスに於けるが如く教科課程の最高位に、理性的探求——廣義の哲學——を置く事は整頓せる古代教育思想に共通なる特色であつた。

後の卷に述べるであらう如く、羅馬精神の實踐的意志力と基督教精神の中核たる宗教的純情とに對立して、希臘精神を貫くものは實に聰明なる知力であつて、さればこそやがて羅馬精神も基督教精神もそれが希臘化せられることは、同時に知性化せられ學問化せられることに外ならなかつたのである。

希臘教育の第三の特質はその不平等性に見出される。そしてその一つは階級的差別である。これはスパルタの如く峻嚴なるものもあり、アテナイの如く内政の發展によつて(特に自由民相互の間に於ては)次第に緩和されたものもあつたけれども、一般に自由民と奴隸との區別は希臘人に取つては自明の前提であつて、政治も經濟も道德もこれに基づき、教育及び教育思想が問題となる限り、それは常に自由民の教養に關してであつた。尤も希臘の奴隸は必ずしも種族的に劣等なる素質を有するものではなく、唯戦争や經濟關係の經緯によつて捕はれ若くは買はれたに過ぎなかつたが故に、例へば童僕中の或る者の如く、すぐれた人格と高度の教養とを以て自由民の子弟を教導したのもあつたけれども、ともかくここでは教育の理想内容方法が—例へばアリストテレスに於て最も露骨に表明せられた如く—自由民に適はしきものとして、奴隸らしきものとは意識的に區別せられたのである。階級別に次いで希臘教育の不平等性は男女の性別に現れた。スパルタの女子に對する

國家的尊敬、アテナイの女子に對する家庭的尊重、プラトンの理想國家論に於ける男女平等論などは、男女の地位の輕卒なる評價を警めるに足る材料ではあるが、それにも拘らず、女子はすぐれた男子を生み育てるための方便として敬重せられたのであつて、一般的には男子の從屬的地位に置かれ、教育の制度及び理論も當面の主要對象としては専ら男子を考へてゐたのである。

更に種族的乃至國民的區別も希臘教育の不平等性の中に數へ得るであらう。希臘民族が異民族に對する自恃と偏見、同じき希臘民族内に於けるスパルタ、アテナイ、コリントス、デ、バイ等々の對立抗争を考へるとき、吾々は希臘民族が到底世界の「大國民」となり得ざる素質と傳統とに拘束されてゐたことを想はねばならない。外敵と内訌とを警戒しつゝ、建國創業の企圖を遂行して來た諸國民がその國家の維持發展のために國家的關心を主とせる教育を必要としたことは當然首肯せられ、この意味に於て希臘民族は教育の國家的制約といふ自然の事態を最も素朴に負うてゐたものである。それ故にまたやがて文化の爛熟、自由主義の餘弊が現はれて個人主義が擡頭して來たとき、プラトン、アリストテレス等の大思想家は國家論と密接に結合して國民教育を力説せねばならなかつた。希臘末期の思想家は國家を超えて世界主義的即個人主義的教説を唱へたけれども、それは同時に亡び行く希臘

民族の挽歌に過ぎなかつたのである。斯くして希臘教育本來の面目は階級的性的種族的國民的不平等性に立脚してゐた。これ等の不平等性が超克せられるためには、群小都市國家の傳統に禍されずして世界的大國家たるべき素質と實力とを有する羅馬國民が必要であり、更に進んでは全人類を同じ神の子なる同胞と考へる基督教義が必要であつて、そこに羅馬教育史及び基督教的中世教育史への要望が存するのである。〔完〕

附録第一 希臘教育史年表

古代史實の年代は何れも精確を缺き異説が多い。故に本表の年代も大略を示すに過ぎず、大部分に「約又は頃」の字を附すべきであるが、便宜上省略した。尙本表の年代は何れも西曆紀元前であることは言ふまでもない。

古希臘時代第一期〔前史時代〕

三〇〇〇—九〇〇

三〇〇〇 クレテ、島文化の初期ミノス時代始まる。〔一二〇〇〇〕

二〇〇〇 クレテ、島文化の中期ミノス時代始まる。〔一六〇〇〕

希臘民族のエーゲ世界進出始まる。先づアカイア族進出し、次でイオニア族及びエオリア族進出す。

一六〇〇 クレテ、島文化の後期ミノス時代始まる。〔一一二〇〇〕

一五〇〇 ミケーナイ文化隆盛期に入る。〔一一二

附録

〇〇〕(トロイア文化をも含む)ドリリア族南下してペロポネソス半島に入る。

一四〇〇 ドリリア族クレテ、島に渡る。

一二〇〇 クレテ、島文化の後期ミノス時代終る。ミケーナイ文化の隆盛期終る。

トロイア城市陥落しその文化じぶ。

一一〇〇 ドリリア族の希臘及び小亞細亞南部西岸地方の攻略終る。

一〇〇〇 希臘民族の各種族イオニア族、エオリア族、ドリリア族、エーゲ世界に夫々地盤を獲得して定住す。

『ホメーロス以前のイリアス』(トロイ

遠征詩譚、小亞細亞及びイオニア植

一

民地に傳へらる。

古希臘時代第二期(古典時代前期)

(九〇〇—四七九)

八五〇 ホメロス在り。『イリアス』及び稍々後
れて『オデュッセイア』成る。

傳説的人物リュクルゴス在り。(スパル
タの興隆始まる)

七七六 オリュムピア競技復活す。(オリュムピア
ード紀元)

この頃より『叙事詩のキュクロイ』作られ
初む。

七五二 アテナイの終身國王の任期十年に縮
めらる。(アテナイの政治民主的方向
に進み初む)

これよりオリュムピア競技の優勝者に
橄欖の冠を與へらる。

七五〇 ヘシオドス在り。『勞作と曆日』、『神統

記』、『婦系圖』等成る。

七〇〇 ホメロスの名(カルリノスによつて)初
めて記録に上せらる。

この頃までにホメロス詩篇略々今日
傳はれる形態に成る。

六八二 アテナイの國王の任期一年となる。

九人の執政官選出せられ政治に當る。

六六四 『イリアス』篇(シモニデスによつて)初め
て引用せらる。

ホメロス詩篇、朗唱詩人によつてデーロ
ス島のアポロン祭典に歌はる。

この頃ドラコン法典成る。

六三八 ソロン生る。(五五八歿)

六二四 タレス生る。(五四六歿)

六二一 キクロンの叛亂起る。

六一〇 アナクシマンドロス生る。(五四七歿)

六〇一 アルカイオス在り。

六〇〇 サプキ在り。

この頃より希臘のオルフィック教徒によ
つてディオニソス祭典再興せらる。

五九六 サラミス、スパルタの干涉によつてア
テナイに歸す。

五九五 ソロン、キラ市に對する戰の指導者と
なる。

五九四 ソロン、執政官に選ばれ時局收拾の大
任を托せらる。負債輕減法を布き又
法制を定む。

五八五 この年の日蝕をタレスが豫言せり。

五八六 デルプアイのピュティア競技四年毎に行は
るゝことゝなる。

五八二 デルプアイのピュティア競技の優勝者に月
桂樹の冠を與へることゝなる。

コリントスのイストミア競技再興せ
られ、その優勝者に松葉の冠を與へ、ネ
メア競技に於てはミツバの冠を與へ
ることゝなる。

五七二 ネメアド紀元。これより少しく前に

ネメア競技公認せられ國際化する。

五七〇 クセノブネス生る。(四八〇歿) ピュタ
ゴラス生る。(五〇〇歿)

この頃アイソポス生る。(六二〇—五
六四) 『アイソポス物語』作らる。

五六〇 ベイシストラトス、アテナイの僭主と
なる。(五二七、その間二回配流)

五五八 ソロン歿す。(六三八生)

五五〇 この頃までに『叙事詩のキュクロイ』成立
す。

五四七 アナクシマンドロス歿す。(六一〇生)

五四六 クセノブネス、コロブオンを去り遍歴
の旅に上る。

タレス歿す。(六二四生)

五四一 ベイシストラトス、再度の配流より還
り、アテナイの政權を握る。

ホメロス詩篇の校訂事業行はれ、パン

アテナイア祭に於けるその朗唱方式
規定せらる。

五四〇 イオニア人によつてエレア市建設せ
らる。

五三六 ヘラクレイトス生る。(四七〇歿)

五二九 ビュタゴラス、サモス島を去り、クロトーン
に移つて教團を開設す。

五二七 ペイシストラトス歿す。ヒピアス及
ヒパルコス僭主政治を繼ぐ。(一五一〇)

五二五 アイスキロロス生る。(四五六歿)

五二二 ビンダロス生る。(四四八歿)

五二〇 アナクシメネス生る。(四九九歿)

五一五 パルメニデス生る。(四三〇歿)

五一〇 クレイステネス、アテナイの政權を握
る。

五〇九 クレイステネスの政治改革によりア
テナイの民主政治徹底す。

五〇〇 波斯戦役起る。(一四七九)

この頃クセノブネスの諷刺詩現はれ、
ホメロス及びヘシオドスを攻撃す。

ビュタゴラス歿す。(五七〇生)

アナクサゴラス生る。(四二八歿)

四九九 アナクシメネス歿す。(五二〇生)

四九六 ソフォクレス生る。(四〇六歿)

四九五 エムベドクレス生る。(四三五歿)

四九〇 マラトンの陸戦。(アテナイのミルティ
アデス波斯軍を破る)

プエディアス生る。(四三二歿)

エレアのツテノン生る。(四三〇歿)

四八五 エウリピデス生る。(四〇六歿)

ヘロドトス生る。(四二四歿)

四八一 プロタゴラス生る。(四一一歿)

四八〇 第二波斯戦役起る。

テルモビライの陸戦。(スパルタのレ
オニダス戦死す)

サラミスの海戦。(アテナイのテミス

トクレス、波斯軍を破る)

クセノブネス歿す。(五七〇生)

ゴルギアス生る。(三七五歿)

四七九 波斯戦役終る。

新希臘時代第一期古典時代後期

(四七九—三三八)

四七七 デロス同盟成る。(アテナイ、希臘の霸

權を握る。(一四三〇)

四七〇 ヘラクレイトス歿す。(五三六生)

四六九 ソクラテス生る。(三九九歿)

オリュムピア競技第七回、これより汎

希臘的競技となる。

四六〇 これより前三世紀の終頃までの間に

ネメア競技の管理權はクレオメナイ

よりアルゴスに移さる。

トッキュディデス生る。(四〇〇歿)

デモクリトス生る。(三七〇歿)

ヒポクラテス生る。(三七七歿)

四五六 アイスキロロス歿す。(五二五生)

四五〇 アリストブネス生る。(三八五歿)

四四八 ビンダロス歿す。(五二二生)

四四五 ヘリクレス政權を握る。(一四三一)

この頃希臘文化は黄金期にあり、これ

より短年月の間に、アイスキロロス、ソフォ

クレス、エウリピデス等の悲劇、アリス

トブネスの喜劇、ヘロドトス、トッキュディ

デスの史書等の重要文獻現はる。

又プロタゴラス、ゴルギアス等の所謂

「ソフィステス」達もアテナイに於て活動

す。

四四〇 この頃ソクラテス、デルフォイの神託に

より教育的使命を自覺す。

四三六 イソクラテス生る。(三三八歿)

四三五 エムベドクレス歿す。(四九五生)

- 四三四 クセノブオン生る。(三五五歿)
- 四三二 プエイディアス歿す。(四九〇生)
- 四三一 ベロボンネソス戦争起る。(一四〇四回従軍)
- 四三〇 ポテイダイアの戦。(ソクラテース第一回従軍)
- バルメニデース歿す。(五一五生)
- エレアのヅキノン歿す。(四九〇生)
- 四二八 アナクサゴラス歿す。(五〇〇生)
- 四二七 プラトーン生る。(三四七歿)
- この頃レウキボス在り。
- 四二四 ヘーロドトス歿す。(四八五生)
- デリオンの戦。(ソクラテース第二回従軍)
- 四二二 アムブポリスの戦。(ソクラテース第三回従軍)
- 四一一 プロタゴラス、アテナイを追放せられ、同年歿す。(四八一生)
- 四〇七 プラトーン、ソクラテースの門に入る。
- 四〇六 ソクラテース五百人會の議員となる。(一四〇五)
- アルギヌサイの海戦。(その提督等の處罰に關してソクラテース獨り反對す)
- エウリピデース歿す。(四八五生)
- ソブクレス歿す。(四九六生)
- ベロボンネソス戦争終り、スパルタ、希臘の覇權を握る。
- アテナイに三十人寡頭政治行はれしも、八箇月にして民主政治再興す。
- 四〇四 クセノブオン、ソクラテースの門に入る。(一四〇二)
- 四〇一 波斯に内亂起り、キキロスの遠征あり、クセノブオン之に従軍す。
- 四〇〇 トロキュディデース歿す。(四六〇生)
- 三九九 ソクラテース、告訴せられ、入獄して刑に服す。(四六九生)
- 三九五 コリントス戦争起る。(一三八七)

- 三九四 コロネイアの戦。(クセノブオン、スパルタ王アゲシラオスに従ひアテナイ軍と戦ふ)
- これより後クセノブオン、アテナイを追放せられ、エリス州のスキロスに住み、『アナバシス』、『アゲシラオス』、『キロバイダイア』、『ソクラテースの辯明』、『ソクラテースの追憶』、『饗宴』等の著作を成す。
- 三九〇 イソクラテース、アテナイに修辭學校を開く。
- 三八八 プラトーン、アテナイにアカデメイアを開く。(初期及び中期の諸作品作らる)
- 三八五 アリストブアネス歿す。(四五〇生)
- デモステネス生る。(三二二歿)
- テバイ、スパルタに加擔してマンティネイアと戦ふ。
- 三八四 アリストテレス生る。(三二二歿)
- 三九四 デモステネス生る。(三二二歿)
- 三七九 テバイ戦争起る。(一三六二)
- 三七七 ヒボクラテース歿す。(四六〇生)
- 三七五 ゴルギアス歿す。(四八〇生)
- 三七一 レウクトラの戦。(テバイのエバミノンダス、スパルタ軍を破る。)
- 三七〇 デモクリトス歿す。(四六〇生)
- 三六七 アリストテレス、アテナイに来てアカデメイアに入る。
- プラトーン第二回シケリア旅行。
- 三六〇 プラトーン第三回シケリア旅行。(この前後に後期諸作品作らる。)
- ビュロン生る。(二七〇歿)
- 三五六 アレクサンドロス大王生る。(三二三歿)
- 三五五 クセノブオン歿す。(四三四生)
- 三四七 プラトーン歿す。(四二七生)
- アリストテレス、アカデメイアを去り、

西洋教育史 第一卷 希臘編

- アタルネウスに赴く。
- 三四二 アリストテレス、マケドニアの王室に招聘せられ、王子アレクサンドロスの師傳となる。
- メナンドロス生る。(二九一歿)
- 三四一 エピクロス生る。(二七〇歿)
- 三三八 カイロ、ネイアの戦。(希臘、マケドニアの覇權に従へらる)
- イソクラテス自殺す。(四三六生)

新希臘時代第二期(世界主義時代)

(三三八—一四六)

- 三三六 キティオンのヅテノン生る。(二六四歿)
- 三三五 アリストテレス、マケドニアの王室を去り、アテナイにリュケイオンを開く。
- これよりアリストテレスの多くの著作成る。教育史上特に重要な文獻『政治學』ニコマケイア倫理學等もこ

- の頃現はる。
- 三三四 アレクサンドロス大王の遠征始まる。(一三二三)
- 三三三 アレクサンドロス大王歿す。(三五六生)
- アリストテレス、アテナイを遁れ去り、カルキスに移る。
- プトレマイオス、埃及に王朝を始む。(一三〇)
- 三三二 アリストテレス歿す。(三八四生)
- 三三〇 デモステネス歿す。(三八四生)
- 三二八 ヅテノン、アテナイにストア學派を開く。
- 三〇六 エピクロス、アテナイに學園を開く。
- 二九一 メナンドロス歿す。(三四二生)
- 二八〇 アレクサンドレイアに學園及び圖書館開設せらる。

- 二七〇 エピクロス歿す。(三四一生)
- ピュロン歿す。(三六〇生)
- 二六四 ヅテノン歿す。(三三六生)
- 二四五 テオクリトス歿す。(三一〇生)
- 二四四 スバルタ王アギス四世(三四四—二四〇)及びクレオメネス三世(二三六—二二二)、リュケイルゴス時代への復歸を標榜して國政の改革を企て失敗す。
- 二四〇 この頃ベルガモンに學藝勃興す。
- 一四六 羅馬の將軍ムムニウス、コリントスを攻略し、これより希臘は羅馬の屬領となる。

附録第二 希臘教育史研究文獻

一 史料

史料の中にも根本史料と第二第三史料との價値等級があるけれども茲ではその問題には觸れずに必要な限りは本文中に論述してある。唯希臘語で記された原典を一括して史料に數へることとする。その中で

(一) 希臘語原典のみを載せたもので本書に利用された主なものは

Scriptorium Classicorum Bibliotheca Oxoniensis.
(Oxford Classical Texts) の中

Platonis Opera. Ed. by J. Burnet. 5 vols.

右の中更に教育史上重要なものとして
本書に多く引用されたものを示せば次の通りである。

(括弧内は本文上欄に記した希臘綴の標

題數字は全集中に收められた巻數

- Euthyphro. (Euthyphron). (I)
- Apologia Socratis. (Apologia Sokratis) (I)
- Crilo. (Kriton). (I)
- Phaedo. (Phaidon). (I)
- Theaetetus. (Theaitetos). (I)
- Sophista. (Sophistes). (I)
- Symposium. (Symposion). (II)
- Phaedrus. (Phaidros). (II)
- Charmides. (Charmides). (III)
- Laches. (Laches). (III)
- Lysis. (Lysis). (III)
- Protagoras. (Protagoras). (III)
- Gorgias. (Gorgias).
- Meno. (Menon). (III)
- Respublica (Politeia). (IV)

Leges (Nomoi). (V)

Epistulae. (Epistole). (V)

Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum

Teubneriana. S 卅

Aristoteles, Politica. (Politika). Ed. by O. Im-
misch.

Aristoteles, Ethica Nicomachea (Ethika Nikom-
acheia). Ed. by O. Apelt.

Aristoteles, Athenaiou Politia. (Athenaion Po-
liteia). Ed. by Oppermann.

(二) 希臘原典に英譯を添くたものとして

The Loeb Classical Library. S 卅

Homer, The Iliad. (Ilias). Tr. by A. T. Murray.
2 vols.

Homer, The Odyssey. (Odysseia). Tr. by A. T.
Murray. 2 vols.

Hesiod, The Homeric Hymns and Homeric. S
中特に本書に利用せられたものは

附 録

Hesiod, Works and Days. (Erga Kai Hemera).

Hesiod, The Theogony. (Theogonia).

The Homeric Hymns. S 卅

To Delian Apollo. (Eis Apollona Delion).

The Epic Cycle. S 卅

The Aethiopsis. (Aithiopsis).

The Little Iliad. (Ilias Mikra).

The Sack of Ilium. (Iliou Persis).

The Returns. (Nostoi),

Herodotus. Tr. by A. D. Godley. 4 vols.

Thucydides. Tr. by C. F. Smith. 4 vols.

Pausanias, Description of Greece. Tr. by W. H.
S. Jones. 5 vols.

Xenophon, Cyropaedia. Tr. by W. Miller. 2 vols.

Xenophon, Memorabilia and Oeconomicus. Tr.
by E. C. Marchant.

Diogenes Laertius, Lives of Eminent Philosophers. Tr.
by R. D. Hicks. 2 vols. S 中特に本書に利

西洋教育史第一巻希臘編

用せられたものは左の通りである。(数字は右全集中の巻数)

- Solon. (I)
 Socrates. (I)
 Xenophon. (I)
 Plato. (I)
 Aristotle. (I)
 Zeno of Citium. (II)
 Pyrrho. (II)
 Epicurus. (II)
 Plutarch, The Parallel Lives. Tr. by B. Perrin. 11 vols. の中特に本書に利用せられたものは左の通りである。(数字は右全集中の巻数)
 Lycurgus. (I)
 Solon. (I)
 Agis and Cleomenes. (IX)

(三) 希臘原典に獨譯(但し断片のみに獨譯あり、所傳には無し)を添へたものとして本書に

利用したのは

- Diels, H. Die Fragmente der Vorsokratiker. 4 Aufl. 1922. 3 Bde.
 (四) 希臘原典に註釋を添へたもので、本書が主としてその註釋を利用したものは次の諸書である。
 Adam, J. Platonis Euthyphro. With Introduction and Notes. 1926.
 Adam, J. Platonis Apologia Socratis. With Introduction and Notes.
 Adam, J. Platonis Crito. With Introduction and Notes. 1913.
 Adam, J. Platonis Protagoras. With Introduction and Notes. 1928.
 Adam, J. The Republic of Plato. With Critical Notes, Commentary and Appendices. Vol. 1. 1926. Vol. II. 1921.
 Burne, J. Plato's Euthyphro, Apology of Socrates and

Crito. With Notes, 1924.

Burnet, J. Plato's Phaedo. With Introduction and Notes. 1925.

Bury, R. G. The Symposium of Plato. With Introduction, Critical Notes and Commentary. 1909.
 Thompson, E. S. The Meno of Plato. With Introduction, Notes and Excursuses. 1901.

Thompson, W. H. The Phaedrus of Plato. 1901.

Schmelzer, C. Platos Ausgewählte Dialoge. Charmides. Lysis. 1884.

Schmelzer, C. Platos Ausgewählte Dialoge, Iaches. Ion. 1884.

Schmelzer, C. Platos Ausgewählte Dialoge, Menon. Euthyphron. 1883.

Schmelzer, C. Platos Ausgewählte Dialoge, Symposium. 1915.

Newmann, W. L. The Politics of Aristotle. 4 vols. 1887
 Stewart, J. A. The Nicomachean Ethics of Aristotle.

附 録

1892.

(五) 近世語に翻譯された史料の中本書に利用せられたものは

- 編註 The Loeb Classical Library の外に
 Schleiermacher, F. Platonis Werke. 6 Bd. 1836.
 Jowett, B. The Dialogues of Plato. 5 vols. 1861.
 Oxford Translation, Aristotle's Works. Ed. by J. A. Smith and W. D. Ross.
 Aristoteles. Philosophische Werke. (Philosophische Bibliothek) の巻 II. Bd. II.
 Monroe, P. Source Book of the History of Education for the Greek and Roman Period. 1919.

二 參考書

- Burckhardt, J. Griechische Kulturgeschichte. Herausgegeben von Jakob Geri. 5 Aufl. 4 Bde. 1898.

Burnet, J. Early Greek Philosophy. 4 Ed. 1930.
 Busse, A. Sokrates. (Die Grossen Erzieher). 1914.
 Droysen, J. G. Geschichte des Hellenismus. 2 Bde. 1836-43.
 Friedländer, P. Platon, Eidos, Paideia, Dialogos. 1928.
 Gompez, H. Sophistik und Rhetorik. 1912.
 Gomperz, Th. Griechische Denker, Eine Geschichte der Antiken Philosophie. 3 Bde. 1923.
 Grote, G. A History of Greece. Condensed and Edited with Notes and Appendice, by J. M. Mitchell. and M. O. B. Casparl.
 Guhl und Koner, Leben der Griechen und Römer. 6 Aufl. 1893.
 Kappes, M. Lehrbuch der Geschichte der Pädagogik. Bk. I. 1898.
 Maier. Sokrates, Sein Werk und Seine Geschichtliche Stellung. 1953.
 Monroe, P. A Text-Book in the History of Education.

Natorp, P. Platos Ideenlehre, 1921.
 Natorp, P. Platos Erziehungslehre. (W. Rein, Encyk.).
 Nelson, L. Die Sokratische Methode. 1929.
 Nettleship, R. L. Lectures on the Republic of Plato. 1925.
 Nietzsche F. Die Geburt der Trilogie aus dem Geist der Musik. 1872.
 Raeder H. Platons Philosophische Entwicklung. 2 Aufl. 1920.
 Ritter C. Untersuchungen über Plato. (Die Wahrheit und Chronologie der Platonischen Schrift. ten. 1888)
 Rohde E. Psyche, Seelenkult und Unsterblichkeitsglaube der Griechen. 1907.
 Schmidt K. Geschichte der Pädagogik in der Vorchristlichen Zeit. 1890.
 Smith, W. A Classical Dictionary of Greek and Roman Biography, Mythology and Geography. 1925.

Stenzel, J. Platon, Der Erzieher. (Die Grossen Erzieher) 1928.
 Stenzel, J. Studien zur Entwicklung der Platonischen Dialektik von Sokrates zu Aristoteles. 1931.
 Taylor A. E. Plato, The Man and his Work. 2 Ed. 1927.
 Ueberweg, F. Grundriss der Geschichte der Philosophie I Teil. (Die Philosophie des Altertums, herausg. von K. Praechter) 1926.
 Wilanowitz-Moellendorf, Platon, Sein Leben und Seine Werke. 2 Bde. 3 Aufl. 1929.
 Willmann, O. Aristoteles als Pädagog und Didaktiker. (Die Grossen Erzieher). 1909.
 Windelband W. Platon. 7 Aufl. 1923.
 Windelband W. Geschichte der abendländischen Philosophie im Altertum. herausg. von A. Goedeckemeyer. 1923.
 Windelband W. Lehrbuch der Geschichte der Philosophie.

Zeller, E. Philosophie der Griechen. 6 Bde. 1879-1909.
 Zeller, E. Grundriss der Geschichte der Griechischen Philosophie, 12 Aufl. 1920.

三 邦文参考書及び翻譯書

波多野精一氏著 西洋宗教思想史 希臘の卷第一
 出 隆氏著 西洋哲學史 第一卷
 坂口 昂氏著 世界に於ける希臘文明の潮流
 田上 楠次郎氏共著 希臘文學史
 原 隨 圓氏著 ギリシア史研究
 村川 堅 固氏著 希臘史
 福島 政 雄氏著 希臘教育史
 同 氏著 教育者としてのソクラテス
 稻富 榮次郎氏著 プラトンの教育學
 木下 一 雄氏著 希臘倫理史
 久保 大 郎氏共譯 プラソクラテスの辯明・クリトン
 菊池 慧 一郎氏譯 プラトニオン

西洋教育史 第一卷 希臘編

同 氏譯
 後藤孝弟氏譯
 鹿野治助氏譯
 岡田正三氏譯
 原隨圓氏譯

ブラゴルギアス
 トンブイレーボス
 プラソピステース
 プラトン全集(刑行中)
 テレストアテナイの國家

附録第三 希臘教育史索引

〔一〕 事項索引

ア

愛者	二七三	アテナイの國家理想	一四八
愛人者	二七三	アテナイの學校	一四二
愛弟子	二七三	アテナイの教育	一三六
アカイア族(アカイア人達・アカイオイ)	一八・一九・三三・三三・三三	アテナイの諸學派	五九三
アカイア同盟	六〇九	アテナイの大學	五九六
アカデメイア(アカデミイア)	一四四・一九・四七	アテナイの婦人	一七一
アガトンのエロース論	四八〇	アテナイ人の教育者	三四
アキレウスの憤怒	四〇	アナムネシス(想起)	四六
アキレウスの楯	四七	アパテイア(無情欲)	六二・六八
アクロアテリコス	五三	アポテタイ	二二五
アクロポリス	二〇六	アポリア(行詰・難進・當惑)	四三・四三
アゴラ(集會)	二〇・二四	アポロンの精神	一九二
アタラキシア	六〇六	アポロンの讃歌	三三
アテナイの建國	二三	アッテイケイ族	一八・二四
		アッテイケイ語	二
		アナルキア(執政官缺如)	二〇三
		アマゾン人達	五
		アマフィクテオネス	一三
		アリア族	一七
		アリストテレスの生涯	五七七
		アリストテレス形而上學の教育的意義	五七六
		アリストテレス倫理説と教育	五七七
		アリストテレスの國家論と教育	五八四
		アリストテレスの教育段階論	五八四
		アリストテレスの史的地位	五八六
		アリストプラネスのエロース論	五八八
		アルクマイオニダイ	四七五
		アルケ(原質・出發點)	二八
		アルコン(執政官)	一八〇・三二
		有るもの	一三五
		アレウダイ王家	一八四
		アレオパゴス	二三〇
		アレクサンドリア時代	二六・三五
		アレクサンドリアの學府	五九九
		アレクサンドレイアの圖書館	五九七
		アレクサンドロス大王の遠征	五九七

イオニア族(イオニス)	六・二八・二九・三〇・三一	運命觀	六二・六五
イオニア語	二〇	運命の車輪	一九〇
異教的基督教的二元	三	エビステイメ(眞智・智見・認識)	四四・四九
「一萬人の退却」	一五四	エビタプイオン	一四六
イソクラテイスの生涯	五五二	エポケー(判断中止)	一四三・五九六
イソクラテイスの著作	五五六	英雄	六七
イソクラテイスの修辭學校	五五七	英雄時代	五
イデア	五七	エラステイス(愛者)	七・七三・七二・三九
一般陶冶	二七三・二七四・四九八	エリステイケー(論争術)	一八七
『イリアス』篇の原型	五八五	エリユクシマコスのエロイス論	四七一
『イリアス』篇の内容	二六	エレア學派	一八四
『イリオン攻略』	三九	エロイス	七三・七二・五八四・四八九
イレーン	五三	エロイスと教育	四六五
インク	二七	エロイスに關する慣習	一七六
印度歐羅巴人種	一四二	エロイスの發展段階	五三一
ウ	一七	エロイスの辨證的性格	四七五・五〇〇
生みの親より育ての親	二七	圓極(圓現)	五七六
乳母	一三九	厭世的現世觀	五六
		圓盤技	八六
		演武舞踊	七五
		黄金種族	一八九
			八六

オストラキスマス	二〇四	階級的差別	六二四
『オデュッセイア』篇の梗概	五三	懷疑派	九
オノマ(言葉)	二二六	懷疑派の思想	六〇四
オリュムピア競技	六	會食	一一・二〇
オリュムピア競技の起源及び復活	一五	蓋然性	六〇七
オリュムピア競技の経過	一五	開發的方法	四二五
オリュムピア競技の期日	一五	カイロネイアの戦	九
オリュムピア競技の選手資格	一五	學校	一四三
オリュムピア競技の種目	一五	學の傳承	一八一
オリュムピア競技の賞品	一六	學頭	五九二・五九六
オリュムピア競技優勝者の優待	一六	格闘	二八
オリュムピア競技の暗黒面	一六	學識の商人	二四三
オリュムピア競技の頽廢	一六	合唱舞踏	一四三
オリュムピアス(オリュムピアード)	一七	寡頭政治	二六
オルフェウスの教義	一七	可能態	五七六
オルフィック教徒	一八・一九	カマレス式の土器	一一
音楽	二九・三〇・四七	神に充たされたる状態	一九〇
		神への奉仕	二六三・三〇一
カガ		紙	一四三
		カリユアデイスの渦卷	五七
		カレレス	一〇
		閑暇	五八五
		監督官	一一〇
		還元法	四三六
		觀照的生活	五九
		橄欖	一六二
		キギ	
		機械因	五七六
		ギガンテス	九五
		ギガントマキア	九五
		喜劇	二九三
		喜劇詩人	二八
		キコネス	五五
		擬人的神觀	六二・二八二
		季節に適合する勞作	八九
		キタラ琴	一四三
		キニク學派	二三五
		詭辨	二三四
		希望	六六
		客觀性と主觀性	四六
		澆世的現世觀	六
		共通感官	五七六
		共通語	三

享樂的生活	五八〇	競技	七四	希臘の聖書	二〇
キュクロプス城壁	一四	巨人軍	九五	希臘悲劇の誕生	一八
キュクローベス	五五	巨人戦	九五	希臘社會に於ける婦人	一七
ギムナシオン	一四・一七三	共住團體	一〇一	金權政治	一三
ギムナステース	一四	郷土科	一四	吟唱詩人	元
キュロンの叛亂	二八	享樂主義	二八	近世に於けるオリュムピア競技の復活	一七
教育本質論	四〇五・五〇三	基督教教育	六〇	銀族の代	六
教育目的論	四〇七・五〇二	希臘教育の全體的特質	六〇	勤勉	六
教育方法論	五二〇・五八六	希臘教育史の地位	一	吟味	六
教育者の人格	二七〇	希臘教育史の重要性	四	禁欲主義	三〇
教育者の性格	四〇一	希臘教育史の時代區分	一		
教育者たるの自覺と自恃	二二	希臘教育思想の基調としてのエロース	一六		
教育者の天分	三〇五	希臘語の方言	二〇	區	三〇三
教育的思慕	五〇	希臘精神の教育的生命	四	クセノブオンの生涯	五六一
教育的天才	三三	希臘主義時代	九	クセノブオンの著作	五六二
教師	四四	希臘哲學史の教授價值	四	クセノブオンの教育思想	五六三
教科課程	五〇・五八六	希臘文化の世界化	五〇	クノソス王宮址	一一
共有饗宴場	二五九	希臘文化の地位	二	「暗き人」	一八七
共同關係	五九	希臘文化の羅馬征服	九・六〇	クリュプテイヤ	一一
共軛關係	五九	希臘民族	一七	クレテー文化	一一
行列歌	七四	希臘民族のエーゲ世界進出	一七	クロナス時代の生活	一一三
		希臘の新教育	三〇	軍國主義	一一三

軍國主義的統制國家

敬虔	二七三	古アカデミ	五九三	公訴	二六六
形式的陶冶價值	二六一	古イオニア語	二	五代思想	八六
形相	五七六	古ストア派	五九五	骨相學的判定	一九六
系譜詩	九一	古希臘時代第一期	五・一〇	古典的	八
啓蒙時代	二三八	古希臘時代第二期	六	古典時代	八
ゲオ・モロイ	二二六	後期ミノース時代	一一	古典時代前期	八
月桂樹	八〇・二六二	硬教育	一一三	古典時代後期	六
結婚	九〇・二六二	國王	一〇九	古典的(標準的)希臘語	八・一〇一
缺席裁判	二九〇	國法	三五・六〇六	孝の道	二
ゲルマン民族	三	國法契約說	三五七	幸福	一九三
原型	一	國家契約說	三五七	合理主義	四二〇
現世主義	六二	國家主義	三三	コリントス戦争	四一九
現實態	五七六	國家主義教育の原型	一三・五五	傲慢と名譽心	五九〇
賢者	一八〇	國家組織の原則	六	五百人會	二二八
拳闘	七五・二八	國際教育	五二		二〇四
權力主義	二三八	國際的祝祭(競技)	六・七〇	サ	
元老院	一〇六	國民的差別	一五〇	左翼ソピステース	二六
		五種競技	六二五	山地黨	二〇一
		個人主義	一四二	讚美歌	二九
		コスモポリテース	六〇八	算用石	一四三
		個性と國家	五二	三百勇士	一一七
		講述法	五七三		

シジ

死	三三三	師弟の情愛	七〇	種族的差別	六二五
集會	七	私的生活	三三	主知主義的特色	七・六二
識見	三三	兒童監督官	二五	シユノイキア	二四
自給自足	一〇二	自發性と協同	四四	棕櫚	一六二
仕事の實行家	七〇	四百人會	一三五	「十一執行委員」	三九
侍女	一四〇	市民(ポリテイス)	九	「十四人」の人身供御	三九
詩人達	三〇〇	射術	七五	巡廻式	三九
自然(アユシス)	三〇〇	自由	一〇二	巡廻日	一〇
自然主義	三〇〇	自由教育	一〇二	小亞細亞人	一〇
自然研究者即無神論者	三〇〇	「自由集會場」	一四七・四九五・六四	「小イリアス」	五二
私訴	三〇〇	自由と權威	五三	小宇宙	二〇〇
自給	三〇〇	自由人の教養の原型	四三	淨化	二〇〇
七賢人	三〇〇	十分の一税	六	淨福者の島	一九〇・一九・五八〇
嫉妬	三〇〇	習慣	五八・五八三	初期ソプイステイス	五三〇
實踐	三〇〇	習性	五三	初期ミノリス時代	三〇〇
實踐的常識	三〇〇	種概念と類概念との關係	二八	職業的教師	一一
實踐的理性	三〇〇	主觀主義	四九	職業陶治	二九五
質料	三〇〇	主觀的個人主義	三五	植民地諸學派の思想と教育	一七九
子弟愛	三〇〇	宗教的態度	四八	常識主義	二二五
師弟の關係	三〇〇	手工業者達	四八	逍遙學派	五七・五九三
	七・七三・一八一・五〇九	種子(スベルマ)	三〇〇	「叙事詩のキユクロイ」	三六・五〇
		シュシティア	一九九	叙事詩語	二二

助産術	二七八・四四	神祕主義	四八	正義と勤勞	九七
助成	二四	新ビニタゴラス學派	一九三	精神的愛	五〇五
女子の教育	一四七	新約聖書原典	三	精神科學	二九九
女子の陶冶理想	一四七	水泳	一七	精神科學派	二〇〇
少年の教育	一四〇	數學	一七	精神構造	二〇〇
賞品	七	スケリア國の樂土	一七	精神上的貴族主義	三九
淨福者の島	七	スキユレ	六八	精神的生産	五〇三
小邑	一〇二	ストア學派	五九	政治家	二九八
新アカデミ	五九三	ストア學派	六〇	政治上的術	三三
新イオニア語	二	ストア學派の思想	九・五九四	政治的生活	五八〇
陣營國家	一三	スパルタの呼稱	六〇	成人教育	一四六
新希臘時代第一期	七	スパルタの建國	一〇二	生成	五〇二
新希臘時代第二期	八	スパルタの國情	一〇三	生成の環	一〇
進軍歌	一九	スパルタの教育	一〇四	青銅族	八七
人文主義	一四九・六一	スパルタの婦人	一〇四	西南學派	五八九
人文主義	一四九	スパルティアタイ	一〇四	青年の教育	一四三
新人文主義	三	「すべてがすべての中に」	二〇〇	青年の墮落	三〇七
神聖な狂亂	一九〇	角力	七五	セイレネス	五六
「神統記」の梗概	九	正義	八六	性的差別	六二四
神靈	八六			セウギタイ	一三四
信仰	三三			世界市民(コスモポリテイス)	九
				世界觀の整序	九八

世界國家	六〇三	迦及的捨象法	四三六
世界主義時代	九・五〇〇	俗見	五三三
世界主義時代の思想界	六〇〇	ソクラテース研究文獻	二四四
攝政	一〇七	ソクラテースの生涯	二四七
說得	二二二	ソクラテースの教育者の人格	二六二
全アカイオイ	一八	ソクラテースの教育本質觀	三九八
「全體的共同社會」	六〇三	ソクラテースの教育目的觀	四三三
全希臘の教育場	一四九	ソクラテースの教育方法	四三三
前史時代	五・一〇・二〇	ソクラテースの史的地位	四三六
先住民族の文化	一〇	祖國愛と汎希臘的精神	一七〇
善と正義の絶對性	三五二	葬祭競技	七四・一五三
善美	一四九	創作	五九
善のアイデア	五二六	ソフィア(智)	二二・四九九
戰車競走	七四	ソフィア(智)達	二二
僭主	二〇三	ソフィステースの意義	二四
僭主政治	一〇八・二〇三	ソフィステースの教育者の態度	二二
節制	四二二	ソフィステースの教科内容	二〇
セラペイオン	五九七	ソフィステースの教育方法	三九
想起	三三七・四二六・四二	ソフィステースの積極的功績	二二八
想起說	五二	ソフィステースの消極的功績	二四二
		ソブス(智者)	二二
		相對主義	二二

ダイモーンの抑止	三九	中期アカデミー	五三
ダイモーンのなもの	三九	中期ミノス文化	一一
松明競走	一四六	中隊	二五
鷹と鷲の話	八七	地中海人種	一〇
多忙	五八五	中庸	五八・五〇二
戰の理想と平和の理想	七	受動的理性	五九
堅琴	七	直覺主義	四九
魂の離脱	一九〇	長口舌	三三
タルゲリア	二四七	聽講者	一九六
タルゲリオン	二四七	跳躍	七
タルタロス	九五	調和的發展	一四九
短言法	二三四		
彈唱詩人	二四・七九	テデ	
男子の同性愛	一七二	ディアロコス	一八六
單子論	二〇〇	ディアノイア	五三
短艇競漕	一四六	ディオティマ・ソクラテースのエロース論	四八七
		ディオニユスの精神	一九二
		ディオニユスの劇場	二〇七
		ディオニユスの崇拜	一八七・一九
		ディオニユスの祭	一九〇・二〇七
		ディトケラムボス	四四二
		テオリア(祭事・觀照・理論)	七〇・三六七
智慧と勇氣との價值	七	テクネ(技術)	四九九
智の智	四三	テーテス	一三四
地下の神靈	八七	貞潔	七
智行合一	四九	テトラロギア(四部曲・四部作)	二六二
		テバイ戦争	五九〇
		デマゴゴス(大衆指導者)	二五
		デミウルゴイ	二六
		デルプイの競技	二二
		デルプイの神託	一五三
		デロスの宗教同盟	三〇三
		轉向術	一三
		傳統破懷主義	五〇七
		傳統盲從主義	二九
		天文学	三九
		トド	一九七
		當爲の意識	五〇〇
		「度を過すな」	一八〇
		十日目(十日祭)	一八〇
		獨逸學派	五八九
		徳の可教性	三三

ライストリゴネス
樂天的民族精神
ラブリユス
ラブリユントス

リ

理性
理論(テオリア)
理論的理性
リュクルゴスの傳説
リュクルゴスの經濟政策
リュケイルゴスの法制
リュケイオン
リュコポーン
リュラ琴
貞妻賢母主義
倫理時代

歴史時代
暦日
レスケ

レ

レイトラ 二〇八
レレゲス 二〇

『勞作と暦日』 八四・七
朗唱詩人 七
蠟板 一四三
蠟盤説 五〇六
羅馬教育 六二〇
羅馬の希臘征服 九
羅馬國民の功績 二
ロゴス 一八七・三六・三四七・四四・四六三・五七九・六二三
論争術 二三四

六・三
九
二四

〔二〕 固有名詞索引〔人
名・神名・地名等〕

アイアイエー 五六
アイアコス 七三・三三三
アイアス 三九・四・五・七・三九一
アイアノス 三三三
アイアントドーロス 三二四
アイオロス 三三・五
アイギーナ 一三三・四四六
アイスキネーヌ 一七三・三九・三八
アイスキュロス 三三・二七・二四
アイトラ 二二五
アイソッポス(イソップ) 二四四
アイネイアス 三九・四八
アヴィツェンナ 五八八
アヴェロエス 五八八
アウクソ 一四四
アカイア 一八

ア

アカイオス 三三
アガトクレス 二五
アカデーモス 一四四・四四七
アガトーン 二五〇・三三三
アガメムノン 一四・三八・四一・四七・五二・一〇二・三九
アギス四世 一四四
アキレウス 二四・三八・四七・五〇・七二・四六八
アクシラオス 一四三・一四四
アクロポリス 一一
アグシラオス 五六二
アスクラ 八二
アスクレピオス 三七三・五六八
アステュロス 一六四
アスパシヤ 二二〇
アタマス 一五三
アダム 二八四・五三四
アタロス一世 六〇〇
アタルネウス 五七一
アツァン 一五二
アデイマントス 三三四・四四一
アテーナイ 六・三三・三六・二四

アリストテイオン	二〇三	アルキノース	五四	アンテノール	三九四
アリストテイデース	二三三・二五六	アルキメデース	五九九	アンテレー	一三二
アリストテイボス	二二六	アルケイステイ	四六七	アントニウス	五九六
アリストテレス	七・三三・三〇・三四・二七・二九・ 一三二・一四五・一七四・二〇二・五〇〇	アルキメダス	四五〇	アンドロテイオン	一三二
アリストクセノス	五九四	アルケシラオス	五九三・六〇七	アンドロニコス	五九四
アリストクレス	四四一	アルケモロス	一五三	アンドロマケ	三九・四九
アリストデーモス	三七五	アルケラオス	二五〇	アンニケリス	四四六
アリストプロアネース	二・一〇八・二五五・二五六・二九三	アルゴス	三三		
アリストプロアネース(ピザンティオンの)	五九九	アルタクセルクセース	五六一		
アリストメネース	四四六	アルティ	一五五		
アリストン	四四〇	アルテミス	二七		
アリストン(ストア學派の)	五九五	アルプエイオス	三〇三		
アリストン(プラトンの師)	四四二	アレイオス・パゴス	一五五		
アリラオス	二〇七	アレクサンドロス	二六		
アルカイオス	二二	アレク	一七四・五七一		
アルカス	一五二	アレス	五二・二六・一四四・四八五		
アルカディア	一五二	アローベケ	二四八		
アルキダマス	二三〇	アンセルムス	五八八		
アルキノース	六八	アンテオケイア	六〇〇		
アルキピアデース	二五・一七四・三〇・五二・三八四	アンテオロス	五九三		
アルギヌサイ	二五四・三〇	アンテステネース	一四五・三〇		
		アンテプキオン	二二・三四		

ウ

ウアピオ	一五
ウイコ	二九
ウイラモヴィツ	三二・三三一
ウイルマン	四・五八九
ウインケルマン	三
ウインデルバント	三・四九八
ウエスパシアヌス	五九六
ウオルフ	二九
ウーラノス	九二
ウーラニア	四六九

エ

エヴァンス	一一
エウエノス	二二・二九五
エウクレイデース	三六八・四四五・五九九
エウテュデーモス	三九五
エウテュプロン	二六六
エウノモス	一〇七
エウポリス	二九三
エウポロス	一六五

エウマイオス	五八	エラト	一五二
エウメネース二世	六〇〇	エラトステネース	一五二
エウリビデース	三・一六五・二〇七・二〇八・二五〇・二六一	エリス	三四・五九九
エウリュアロス	七六	エリュマントス	三六・八四・二九
エウリュディケ	一五二	エレア	一五五
エウリュトス	四四五	エレウシス	一八四
エウロタス	一〇一・一六	エレトリア	一四五
エウローペ	一三	エレボス	一三三
エーエティオン	七七	エロース	五九三
エウデーモス	五九三		一七三
エオリア	一九		
エクサイネトス	一六三	オイアグロス	四六八
エクセーケステイデース	二九	オイヌス	一〇三
エケクラテイス	三六六	オイノエ	八二
エニユアリオス	一四四	オギギユ	五三
エパミノンダス	一七三	オデュセウス	二六・三七・三八・四・五三・五四・七〇・七六
エピクイロス	五九五		一九五・二六一・三三三
エピゲネース	三六八	オトユリュオス	九四
エピダウロス	三七三	オネイロス	四一
エピメテウス	八五・八六	オプユルテイス	一五二
エプソス	一八七	オリュムピア	一一・一五五・一五七
エラシストラトス	五九九	オリュムボス	二四・三八五

オルコメノス
オルティア
オルプエウス
オレスティス

カ

ガイア
カイレクラテニス
カイレプオン
カオス
カサンドラ
カト
カドメイア
ガニユクトール
カリユプソ
カルカス
カルキス
カルケードン
カルベルト
カルミデニス
カルネアデニス
カルライスクロス

二一・五・八三

二七

一八九・二五・二八・三三・四六八

一〇二

二五〇・二九七・四〇四

二二

五三

五五

一五

八二

五三・一九五

四〇

一三二・五七四

二六

一六

三九五・四四一

五九三

四四一

二八・二九五

二〇六

三二・三七・二六

五七四

二六

一六五

一六五・五九九

二六・三三

二六・三三

五九四

九二

一四

一九

四四五

五六一

二六・一九八

五六

一三〇

カルリアス
カルリクラテニス
カルリクレニス
カルリストネニス
カルリノス
カリボス
ガレノス

キ

キオス
キケロ
キティオン
ギユニス
キユクロープス
キユメ
キユレネ
キユロス
キユロン
キルケ
キムラ

二五三・五六九

二二二

五九三・五六九・五七二

二二

二六・一六五・一八二・二〇七

二九

三六八

二一

一六七

二二

二二

二二

三九

三九五・四四一

二〇〇

一五五

四四五

三四・五九三

五九三

二二二・四四一・四四三

五九五

五九五

クリュセウス

クリトプロス

クリトーン

クルチウス

クレアンテニス

クレイステネニス

クレオステネニス

クレオナーイ

クレオメネニス三世

クレッティメル

クレティ

クロトーン

クロト

クロノス

ケ

ケオス

ゲイテ

ケイプイソス

ケベニス

コ

四〇

二五八・三三八

二五八・五九・三三八

一六七

五九四

二八・二〇四

一五七

一五四

一一三

一〇

一一・一八

一九三

二二六

八六・九四・一五五

二二九

三

四四七

三四五・三六八

コトス

コドロス

コベルニクス

コヘン

ゴムベルツ

コリントス

ゴルギアス

ゴルゲニス

コロイボス

コロネイア

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

コロブオン

九二

二五・四四一

五九

三

二五

一五五

二二・二九五

一一四

一五七

五六二

三三・一八二

二二

三九五

一九二・五九五

三三・一三〇

五六一

三九・四七

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

四四六

三三三

三四五・三六八

二六・一四二・二二五

三九・四二七

三三一

三七六

四三八・四九七・五〇四

四・四三・四九・五〇四・五〇七

一九三

五〇〇

二八一

一三〇・四四六

一一・一六

三八五

二九

五六二

五六二

五六五

五四

五六八

五九四

五九四

五九四

五九四

五九四

五九四

五九四

五九四

五九四

五九四

五九四

五九四

五九四

五九四

ステュクス	五一	ダイダロス	二四八・二七七
ストラトン	五九四	ダイゲトス	二〇四・二一五
スニオン	三四二	ダマシアス	二〇〇
スパルタ	六	ダモン	二〇五・二五〇
スベウシボス	四四一・五七〇・五九三	タルソス	六〇〇
スミュルナ	二六・三三	タルロー	一四四
スルーヌ	一六八	タレス	二〇八・一八〇
セゼ		ツツ	
セクストス・エムピリクス	六〇七	ヅエウス	一三・三三・八五
セネカ	二七・二九	ヅエノーノン(エレアの)	一八五・二〇五・三三
ゼノドトス	四〇	ヅエノーノン(キティオンの)	五九四
ゼメレ	一八九	ヅエウリクス	二五〇
セルウィウス・トゥルリウス	八		
ソ		テデ	
ソクラテース	七・七四・二四七	ディオクレリス	三九五
ソタデース	一六四	ディオゲネス・ラエルチウス	二四四・二六二
ソポクレリス	二・二〇七・二〇八	ディオゲネス(ストア學派の)	五九四
ソプロニコス	二四八	ディオニシオス(シュラクサイ王)	四四六
ソロイ	五九五		
ソロン	二九・一四六・一七四・四四一		

テセウス	二四・二五・二六〇	トラシメロス	二六二・三三七・五九三
テティス	三六・三八・四一・四六八	トリナイ	二二六
テマデース	二八	トリナキエー	五七
テミストクレス	二二・二五・二五八	トリプトレモス	三三三
デーメテール	九四・一三・一四五	トロイア	一五・二四
デーモクリトス	一九九・三六	ドロイゼン	九
デーモステネス	二〇九	ドロビデース	四四一・三三
デーモドコス	五四・七七		
デーリオン	二五二・三九三	ナ	
デルフェルド	一一・一七	ナウシカア	五四
テルプシオン	三六八	ナウシトリス	六七
テルモプユライ	一一七	ナクソス	二七二
テレマコス	三八・三九・五八	ナトルプ	四・五〇・五八九
デーロス	七九・五九		
テュンダレオース	三七	ニ	
テュムブレ	五一	ニカノール	五九
		ニコストラトス	三四
トド		ニコマコス(アリストテレスの父)	五六八
トウキユディデース	一九・二二・二四・二八・三三・三三〇	ニコマコス(アリストテレスの子)	五七四
トマス・アキイナス	二五六	ニーチェ	三・九一
トラシマコス	二二・二六		
		ネ	
		ネオプトレモス	五二・五三
		ネストール	三九・四一・四四・五八・三九四
		ネーレウス	二二八
		ハババ	
		ハイデッガー	三
		バイナレテ	二四九
		バイロン	三五
		ハインド	三三九
		パウサニアス	二八・三〇・一七五
		ハギア・トリアダ	一三
		バクコス	一八九
		ハデース	九四
		ハドリアマス	一五四・五九六
		パトロクロス	三九・四五・四六・七二・一七二・四六八
		パナイテイオス	五九五
		パーネット	二八一
		ハーバート	一六八
		パライモーン	一五二
		パラメーデース	三九・六一・三三三

昭和九年五月五日印刷
昭和九年五月十日發行

定價金五圓五拾錢

著者 石山脩平

東京市神田區駿河臺三丁目一番地

發行者 目黑甚七

東京市牛込區櫻町七番地

印刷者 堀修造

東京市牛込區櫻町七番地

印刷所 日清印刷株式會社



西洋教育史
第一卷
第一篇

發行所

東京市神田區駿河臺三丁目
新長岡市表町四丁目
新潟縣古町通七番町(支店)

目黑書店

(東京) 電話神田一〇五八番 振替口座二八〇九番
(長岡) 電話長岡一八番 振替口座三六一十番
(新潟) 電話新潟九〇三番 振替長野四〇九〇番

13001
稀

録目書刊近刊新店書黒目

文學博士 藤井種太郎先生著	カント倫理の批判	函六判 送料	五、五〇 二、四〇
文學博士 松本重敏先生著	國體正話	紙四六判 送料	〇、三〇 四〇
文部省普通學務課長 服部 續先生著	ヒットラー運動と獨逸の現狀	函四六判 送料	一、八二 一、二〇
廣島高師教授 佐藤熊治郎先生著	國民教育の中心問題	其其 四三	定價 一、五〇 五〇〇
文學博士 檜崎淺太郎先生著	教育革新の本道	函四六判 送料	近 刊
文學博士 福島政雄先生著	ペスタロッチの根本研究	函菊 入判 送料	二、四〇 一、四〇
廣島高師教授 稻富榮次郎先生著	ルッソーの自然觀と教育說	函四六判 送料	近 刊
東京高師教授 大谷武一先生著	改訂學校體操の指導	函四六判 送料	二、〇〇 一、四〇

東京市神田區 駿河臺三丁目 黒目書店發行 振替口座 第九〇八番 東京

255.2

40

